

# 平安初期における密教經典の訓読語

松本光隆

―石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本について―

はじめに

訓点資料が伝えられた古い例は、奈良時代から存する。しかし、漢文訓読語の通時的研究としては、片仮名の加點資料が多く遺されている平安初期の訓点資料より始まる研究が、その成果の密度が高い。平安初期より年代を降りつつ資料を配して、時代時代の言語事象の記述を行い、訓読語の変化が語られるが、時代時代の共時態を取り上げれば、その共時態は、文体差とか、位相差という概念で説明されてきた日本語の相または層を内包する。通時的記述の結果に詳細な像を結ぶべき方向で研究を進めようと目論む場合、前の時代の言語事象が、前の時代の共時態のどの部分を占めるもので、後の時代の共時態のどの部分に対応して変化するかと言った観点は、訓読語の変化の実態を、立体的に描いて行くために基本的に重要且つ必須な視角の一つであろう。

本稿は、後節に詳述するが、石山寺校倉第十二函第三号として所

蔵されている金剛頂一切如来真実摂大乘現証大教王經（以下、金剛頂瑜伽經）卷第二・三の二巻を対象に、言語事象の記述を中心として、密教の經に属する典籍の訓読語の問題を考えてみようとするものである。記述の狙いは、次の二点にある。第一点は、平安初期天台宗關係と目される密教經典の、従来から注目されてきた再読字や不読字の訓法を初めとする事象の、平安初期密教資料に現れる言語事象の実態記述である。第二点目は、同じ資料に加點されている天台宗山門派の平安後期の加點になる宝幢院点の訓読法の記述を通して、仁和二年の訓読と、平安後期の訓読との通時的な問題、訓読語の改変（変化）と保守（伝承）の問題に触れようとするものである。

## 一、石山寺藏金剛頂瑜伽經卷第二・三の史料的价值（一）

### ―平安初期の密教經相經典の加點資料―

本稿に取り上げる石山寺藏金剛頂瑜伽經は、卷子本二巻で、卷第二と卷第三とを伝えるが、卷第二には、平安初期仁和二年（八八六）の白書の奥書、

○仁和二年九月二日聞已於元慶寺圓大師御本/□□□命  
 が存する。本文には、この奥書きに対する白点(第一群点)が加  
 点されており、経関係の密教經典の平安初期の加点資料である事が  
 知られる。本巻第二には、この白書の奥書とは別に、別筆の墨書で、

○治承四季(一一八〇)四月二日於石山寺東院房文泉房傳/受  
 了

の朗籠の奥書があつて、本文にはこれに対応する墨点の仮名の加  
 点がある。また、当該巻第二には、平安後期加點と推定される朱の宝  
 幢院点の加點も存している。

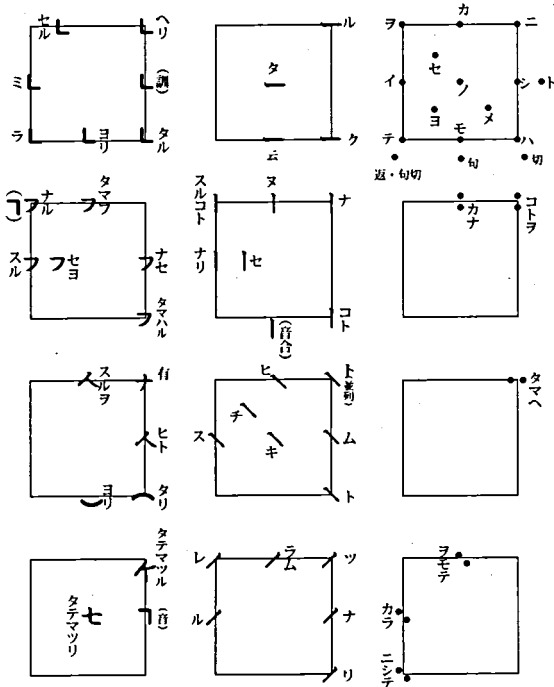
巻第三には、白点の加點はなく、薄朱による第一群点の加點が存  
 して、平安初期のものであると推定される。この他に、巻第二と同  
 じく平安後期加點と思しき朱の宝幢院点の加點が存する。また、多  
 くはないが巻第二と同様に、治承四年の朗籠の加點と思しき墨の仮  
 名点が存して、

○治承四季四月三日於石山寺東院房以/經藏之本文泉房傳受了  
 依未灌頂々々/事者空引之了

の奥書と対応したものであると判断される。

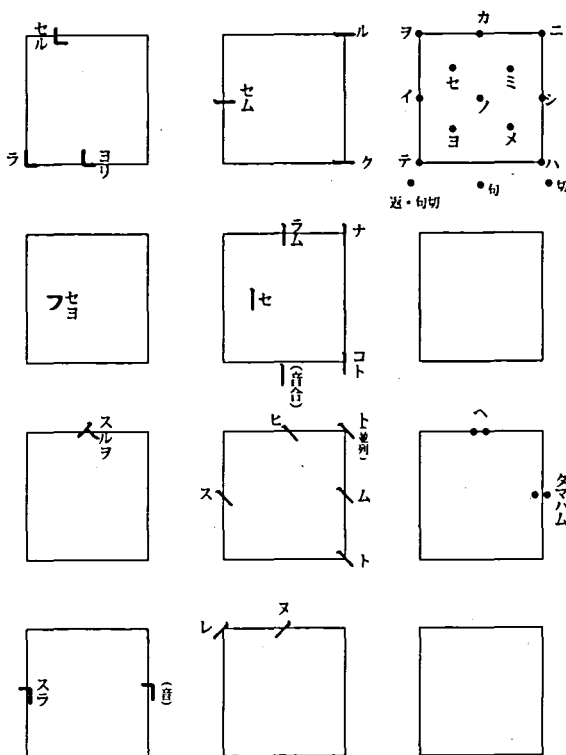
具体的な言語事象を取り上げて後節に説くが、当該資料には、仁  
 和二年点と認めた訓点中に、平安初期の語法が認められるので、巻  
 第二の白書の奥書は、転写ではなく、仁和二年のものであると判断  
 した。また、宝幢院点は、天台宗山門派のヲコト点法で、平安後期  
 には、同派での使用例があつて、十一・二世紀に、同派で盛んに使  
 用されたヲコト点法である。

右の訓点の内、巻第二の仁和二年の白点は、ヲコト点主体で加  
 点されているが、その加點された第一群点は、左掲の如く帰納できる  
 ものである。



この帰納表の第一壺の星点の体系は、西墓点に通ずる。四辺・中央  
 および、右辺中央外側に「と」の点が帰納され、西墓点に合致する。  
 左内側は、「せ」と「よ」を帰納した。点図集に登載の西墓点は、  
 左打ち側の上が、「せ」の音節では無いが、点図集の西墓点には壺  
 の内側上方に「せ」がある。右内側は、下方に「め」を帰納した。  
 これが、点図集登載の西墓点とは異なる。天台宗系の第一群点のヲ  
 コト点と見て、矛盾は無い。

一方、卷第三に加点されている平安初期と思しき薄朱の第一群点は、



と帰納されるもので、卷第三の薄朱のヲコト点の体系が、卷第二の白点のものに比べて単純ではあるが、ヲコト点の符号が担う音節に矛盾がなく、同種のものとして認めて良いように判断される。卷第二は白書訓点、卷第三は薄朱の訓点で加点の色彩が不同であるが、共に仁和二年とみることが出来る様に判断される。

本資料の出自伝来については、治承四年には、石山寺にあった事は確実で、朗龍の伝授に供されている。卷第二の仁和二年の奥書中の「元慶寺」については、既に先学の指摘があるが、「元慶寺」は、

現京都市山科区に存する天台宗の寺院で、僧正遍昭の開基になる花山法皇（九六八〜一〇〇八）ゆかりの寺である。本資料自体が、石山寺に落ち着くまでに、如何なる経路を辿ったのかは明瞭さを欠くが、仁和二年に行われた「元慶寺」での講説の席にあった人物の關係した資料で、天台宗に発するものと考えてよいであろう。これらの事は既に築島裕博士が明らかにされているが、宝幢院点の加点から、天台宗も山門派に伝わったと見てよいであろうと認められる。

本資料は、ヲコト点主体の資料で、仮名点の加点が決して多くはない。後にも述べるが、訓点資料の質としては、一般には、重要性が薄いと判ぜられる類の加点量、加点密度の資料である。ただ、本資料が注目されるのは、密教経典である金剛頂瑜伽經の平安初期の加点資料の実物であると言うことである。

従来より、あるいは、漢文訓読語研究が始まって以来、平安初期の訓点資料は、その希少性と訓点書記の草創期の資料として珍重され、共時的あるいは通時的資料として取り上げられてきている。ただ、通時的研究の資料としての平安初期の訓点資料は、現存の資料的制約に依つて、概して、偏つた言語世界の資料を使用してきたと認められる。先に、立体的な漢文訓読語史を描くためには、通時的な像を描く前提として、時代時代の共時的な位置づけの必要性を説いたが、漢文訓読語研究史上からは、平安初期の訓点資料研究は、研究に使用されてきた資料が時代の共時態の全体を覆つての均等な分布ではない。即ち、言い換えれば、平安初期の訓点資料は、多くは南都古宗の系統を引く、顕教系の諸資料に偏つたものであったと

評価すべきである。

平安時代初期の新興勢力である密教系の宗派、天台宗・真言宗に  
関して、密教系の典籍の将来は、将来目録類に依つて確認されるところ  
であるし、密教經典の訓読は、実証的に確認する事が出来る。  
例えば、真言宗においては、訓点資料そのものには無いが、空海撰  
とされる一字頂輪王儀軌音義は、密教の事相書・儀軌である一字頂  
輪王儀軌から字句を抜き出し、それに万葉仮名和訓などを添えた卷  
音義で、儀軌の訓読の実態を考えねば、存在理由・存在意義の無い  
資料であると判断される。入唐僧の将来の密教經典とは異なるが、  
神護寺蔵の沙門勝道歴山瑩玄珠碑は、平安初期の仮名点資料で、空  
海の撰述書である。大毗盧遮那成仏経疏に關しては、築島裕博士に  
よる言及があつて、真福寺宝生院蔵大毗盧遮那成仏経疏保元二年  
(一一五七) 点本の本奥書中に、承和十三年(八四六) 四月二十五  
日から二十八日に及ぶ講説の記事のある事を指摘されている。聴衆  
は空海の弟子達で、訓点資料そのものが残されたのか否かの実証的  
な確証は無いが、大毗盧遮那成仏経疏の本文の訓読が行われた蓋然  
性は高いと認めねばなるまい。

平安初期天台宗の顕教関係書については、実際の平安初期の加  
点資料が残されていて、著名な華嚴関係資料群がある。年代の明確な、  
著名な加點資料として、延暦年間の奥書の存する資料類で、奈良時  
代最末期・平安極初期の加點年代の明確な資料として衆知されたも  
のがある。また、平安初期貞観十九年(八七七)の天台宗僧儀遠の  
奥書が存する華嚴経元慶三年(八七九)点も知られている。

日本宗教史の事柄として、最澄が中国より伝えたと言われる天台宗  
は、密教において十分ではなかつたと説かれるところであるが、顕  
教系の書の訓読語は、実例について論じる事が出来る。しかし、こ  
の訓読語の出自が問題であつて、今までに先学に依つて古くより触  
れられてきた如く、訓読語の成立の背景には、南都との関係を念頭  
に置かねばならないであろう。

天台宗の密教系の經典類については、本奥書に訓読の事実が伝え  
られた例がある。石山寺蔵金剛界儀軌天永三年(一一一二) 点本の  
本奥書には、「良勇(八五四く九二三)」「敬一(八六七く九四九)」  
の名が見えて、その訓説を伝えているから、密教の事相書である儀  
軌の訓読がなされていたであろうし、実例としての加點資料は、平  
安初期も最末期であるが、石山寺蔵金剛界儀軌寛平元年(八八九)  
点、京都大学蔵蘇悉地羯羅経略疏寛平八年(八九六)点と共に、本  
稿に取り上げる金剛頂瑜伽經が知られている。

円仁や円珍の将来目録には、両者重複するものも少なくないが、  
密教系の經典が多数に上る。本邦における密教系の末書が撰述され  
ている事実があるので、密教系經典が読解されたことは明白である。  
以上の如く、平安初期の真言宗にせよ、天台宗にせよ、密教系の  
經典の訓読が行われたであろうと考えられるものの、実例としての  
密教經典の実際の加點資料は、多く伝えられてはいないのが現実で  
ある。

そうした中であつて、本稿で取り上げて言語事象の記述を試みよ  
うとする石山寺蔵金剛頂瑜伽經仁和二年点本は、平安初期の白点、

薄朱点(第一群点)の加点資料の実物であると共に、平安後期加点と推定される宝幢院点の加点が存して、時代を隔てた天台宗の訓読語の比較が可能で、訓読語の歴史的経緯の解明が可能な貴重な資料として位置づける事が出来る。

## 二、石山寺藏金剛頂瑜伽經卷第二・三の史料的价值(二)

### ―ヲコト点中心の資料の資料性―

右に検討した如く、石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本は、漢文訓読語史の叙述にとつては、貴重な資料である事が理解されると思われるが、訓点資料としての不十分さも明確に自覚しておく必要がある。

当該資料の加点の様態は、巻第二の第一群点の白点も、また宝幢院点の朱点も、ヲコト点主体の加点である。巻第三の薄朱点も、また、宝幢院点も同様に、ヲコト点主体の加点資料である。朗籠による墨の仮名点は、両巻を合わせても数条に過ぎない。平安時代初期の密教の經の加点資料として、非常に重要な資料であると位置づけられるものではあるが、片仮名の加点の用例が多くは拾えない。

ヲコト点の日本語史における価値は、例えば、訓点資料の資料性の評価と関わる部分において存する事が知られている。奥書の存しない場合も、ヲコト点の種類による共時的な言語集団の推定がなされ、また、通時的なヲコト点の発生と伝承が描かれて来ている事によつて資料の年代判定にも資する部分がある<sup>5)</sup>。

しかし、かかる有益な面がある一方で、訓点資料の具体的な訓読

語・訓読語形を取り上げようとする時、資料的価値に心許なさも存する。訓点資料に使われる文字・符号の内、仮名も多くが、片仮名による加点―の場合には、基本的には、一字(字母〔万葉仮名〕に遡つて)は一音節に対応した、一対一の対応関係を時代の共時態に互つて持っている。例えば、語彙論や音韻、語法等の考察には、訓読語の語形の決定に関わつて、重要な拠り所となる。一方、ヲコト点の場合は、その符号に対応した音節が、何であつたのかが、共時的に不確定であることが否めない。中田祝夫博士は、ヲコト点を八群に分かたれたが、その八群のヲコト点において、星点の体系が異なる。同じ時代でも共時的な言語集団の違いによつて、壺の同一の位置に付された星点の担う音節が異なる。即ち、星点の壺における位置的な差が、言語集団集団によつて、別体系を形作る。その体系は、研究の現状においては、先ず、研究者によつて帰納され、一資料におけるヲコト点の全体系が明らかになるのであるが、この帰納されたヲコト点のそれぞれの符号が担う音節が、当時の該当資料に加点した言語主体の言語認識をそのまま正確に表した物であるのか否かが、問題となる。即ち、加点者のヲコト点の認識を、現代の研究者の帰納が、明確に指し示した物であるという客観的保証が必要となるのである。

星点の体系は、八群とも比較的単純な構造で、用例も多いため、帰納されて充てられる音節の蓋然性は高いものと考えられるが、それでも、一星点に二音節以上に該当するヲコト点種もある。線点や鉤点、あるいは、画数も二画以上になる符号においては、該当する

音節（語形）の認定が容易ではない。この研究者の帰納を、当時の言語実態としてより客観的に支えるのは、古聖教に残された点図や、各種のヲコト点図を集成した点図集であろう。かかる問題は、古くより意識されていて、古点図集の研究、点図集の対校や校訂の作業が積み重ねられてきた。

築島裕博士は、中田祝夫博士の八分類を更に進められて、未発見であったヲコト点種を発見され、また、特殊点という分類範疇をたてられて、甲類と乙類の下位分類をされた。ここに、言語資料としてのヲコト点の問題となるのは、築島博士が、訓点資料の博捜を基に、多くの点図集に記載されていないヲコト点を使った資料を見出されたことで、特殊点はその典型であろうが、八群―実際には内、六群―のヲコト点も、点図集に記載されていない体系のヲコト点は、少なからず存するのであって、これらの資料が問題となる。即ち、これらのヲコト点資料のヲコト点は、現状としては、研究者の帰納によるしか無く、謂わば、現代研究者の主観性や解釈が入るのを完全には排除できない。学史的に、古くは、特に、平安初期の資料の訓読文について、複数の訓読文が公にされて、各者各様に異同が存し、所謂、異なつた訓読文が存在していたことを批判の対象にもされたが、この批判は、極めて後ろ向きな研究態度としか言いようがなく、以上の様な実情に鑑みれば、現代においての訓読文間の異同の存在は、当然と言えば当然の成り行きであつて、かかる学問的認識を持つて、訓読文と言う形で公にされた日本語資料と接すべきである。即ち、訓読文作成の立脚点において既に、点図集所載のヲコ

ト点類とは、その訓読文の基礎を支えるものが希薄なのであつて、その事を殊更に取り上げて、論難すべきことでもないことは、至極当然のこととして認識し、その見地から、日本語資料として使用すれば良いだけのことはあるまいか。更に、贅言を添えれば、利用する側は、確例として取り上げられるレベルのものと、些か、躊躇される例とを峻別して、利用すればよいだけのことである。

同一資料内の言語情報として、その価値は、仮名点において高く、これに比較すれば、ヲコト点の、言語情報としての信頼性は低いと論断せねばならない。本稿に取り上げる石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本は、点図集には記載のない第一群点によるヲコト点主体の資料である。ここに、本資料の言語資料としての信頼性についての資料的弱点が存するのであるが、第一節にも述べた如く、本資料にかわる平安初期の、しかも、加元年代の明確な密教経関係の資料は他になく、他に代えがたいところである。右の、ヲコト点という符号の言語資料としての信頼性の低さを、念頭に置けば、本稿自体が、必然的に所詮、極めて脆弱な基盤に立つた論であると認識・評価せねばならないことを、まずここに告白して置く。

### 三、石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点の訓読語

#### ―平安初期語法を中心に―

次には、従来の研究において、注目され取り上げられてきた訓読語の内、仁和二年点の助詞、読添語を中心に記述を行つておく。

第一節に記述した如く、仁和二年点には、星点・左中央に「い」

の音節が現れる。このヲコト点「い」は、

1、爾(の)時(に)毗首羯磨大菩薩の身い「從」世尊の心より  
下(り)て(卷第二・仁和二年点)

2、願(はく)は大乗を現證(し)たまへたるい遍して大理趣を  
流フへたるに。我等汝尊を請(し)たてまつる。(卷第二・仁和  
二年点)

3、金剛形住藏い「於」心(の)中(に)觀(す)當(し)(卷  
第三・仁和二年薄朱点)

4、不動佛い地(に)觸(せよ)(卷第三・仁和二年薄朱点)

などと現れる。この副助詞「い」は、古代の助詞とも称されるもので、平安中期以降には、特定の訓点資料を除いて、その使用は衰退すると説かれるものであるが、本仁和二年点にはその助詞「い」が出現する。第一節に帰納したヲコト点の星点の配列は、外周と中央は、西墓点と等しく、左辺中央の星点は、副助詞「い」として使用されている。

平安初期には、一般に、「者」字を、事物の用字と人物の用字とで、「モノ」と「ヒト」との読み分けると説かれる。当該仁和二年点には、

5、奇(き)哉な精進の甲、我固(き)には堅固の者なり  
(卷第二・仁和二年点)

6、諸の縛脱たる者をを有情の利の故に縛せ令む。  
(卷第二・仁和二年点)

ヲコト点に従って掲げた例であるが、例6には、この右辺中央の「人」のヲコト点とは別に、右辺裾に「と」の加点があつて、「ヒト」の

第二音節に相当するものと認定される。先のヲコト点の帰納において壺右辺中央の「人」を、「ひと」と帰納したが、更にこの例に依つて、「者」字に「ヒト」訓を与えた蓋然性が高まろう。

以上の例は、従来、平安初期の訓点資料には現れる例であつて、平安時代も後半期になると用例が少なくなつたり、あるいは、「者」などは、「モノ」訓が普通となる事象であつて、卷第二の白点、卷第三の薄朱点が、平安初期の訓点である事を裏付ける。また、同資料中の平安後期宝幢院点の訓読は、「者」字に、「モノ」訓を与えている。

金剛頂瑜伽經仁和二年点においては、一方で、従来、平安中期訓点資料になつて出現する事象であると説かれてきた例が、既に仁和二年点に出現する例がある。

7、金剛眼と淨と等は無量壽の輪壇にせよ。(卷第二・仁和二年点)  
孤例であるが、当該資料には多くない片仮名点で記された例で、副助詞「ラ」が出現する。従来説かれて来たのは、京都大学図書館蔵蘇悉地羯羅經延喜九年(九〇九)点が最古の例で、これより遡つた例となる。京都大学図書館蔵蘇悉地羯羅經には、延喜九年の西墓点の加点があつて、当該資料と同系統の資料であると位置づけられる。

次節以降には、仁和二年点の助字と再読字の記述を行い、更に、平安後期宝幢院点の訓読法についても記述することとする。

#### 四、石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本の訓読語

##### — 助字の訓読法 —

まず、当該資料中に現れる助字の訓読法について、記述を行つてみる。

最初に、「從」字の訓読法に焦点を当てる。当該資料において「從」字は、仁和二年点、平安後期点において、以下のように訓読される。

8、爾(の)時(に)毗首羯磨大菩薩の身〔從〕世尊の心〔下〕より下〔り〕  
て一切如來の前の月輪〔返〕に依〔り〕て〔卷第二・仁和二年点〕

9、爾(の)時(に)毗首羯磨大菩薩の身〔返〕世尊の心〔返〕從〔り〕下〔り〕  
て一切如來の前の月輪〔返〕に依〔り〕て〔卷第二・平安後期点(右  
と同一箇所)〕

用例8の平安初期仁和二年点では、「從」字は不読とされ、格助詞「ヨリ」は、漢文の構文において、下接した語句に読添えられる。一方、時代が降つての平安後期点では、例9のように「從」字を直読し、「ヨリ」訓を与えて訓読している。特に、卷第二において「從」字は、屢々出現するが、仁和二年点では、下接語句に「ヨリ」訓が添えられる場合、不読として例外がない。一方、平安後期点においては、用例9の如く、「從」字の「ヨリ」直読例が頻出する。

仁和二年点において「從」字が直読されて、「シタガフ」訓が与えられた以下の様な訓読法も確認される。

10、一切如來心〔返〕に從〔ひ〕て纒〔に〕出〔て〕已〔る〕に〔卷  
第二・仁和二年点〕

11、彼(の)一切(の)花供養(の)嚴飾〔返〕に從〔ひ〕て一切  
世界(の)微塵等の如來の身〔返〕を出して〔卷第二・平安後期点〕  
とした例が認められる。用例10の仁和二年点は、「從」字を直読して、

「シタガフ」訓を与えている。平安後期点の用例11でも、「從」字を直読して、「シタガフ」訓が充当されたものと思しい。

「從」字については、以下の例も認められる。

12、「從」彼の金剛甲冑(の)形より一切世界の微塵等(の)如  
來身を出(た)す〔卷第二・仁和二年点〕

13、彼(の)金剛甲冑(の)形〔返〕從〔り〕「イ」、「從」彼(の)  
金剛甲冑(の)形を〔リ〕一切世界の微塵等の如來の身を出(た)し〔たまふ。〕  
〔卷第二・平安後期点(右と同一箇所)〕

用例12の仁和二年点は、先掲例8と同様、不読の訓法を採る。これに対して、用例13の平安後期の朱宝幢院点では、該当箇所異読が併存する例と認められて、漢文本文「從彼金剛甲冑形出一切世界微塵等如來身」の「形」字には、ヲコト点星点の「を」と返点の二種の加点が存するが、この二点を矛盾無く訓読するには、異訓の併記例であると解釈するのが最も合理的である。即ち、平安後期点においては、「從」字の助詞「ヨリ」の直読例と、「從」字の不読例とが併存していると認められる。後者の場合は、「從」字を不読字とした訓読法で、訓読の状況は全同ではないが、平安初期の仁和二年点の如く、「從」字を不読としている可能性があるものと判断する。

漢文の構文で下接語句に「ヨリ」が読添えられる「從」字の訓読法について整理すれば、平安初期の仁和二年白点では、「從」字は、不読として例外がない。これに対して平安後期点では、「從」字を「ヨリ」と直読した例が頻出するので、平安初期不読→平安後期直読とした、従来から説かれた方向での変化が認められる事象として記述



することが出来る。

しかし、この纏めで万全の変化の状況を記述したものであるかと言えば、不十分であると認められよう。即ち、平安後期訓読の実態は、右の如く助詞「ヨリ」を直読した例が確かに圧倒的ではあるが、動詞「シタガフ」訓を充当したもの、また、孤例ではあるが平安初期点に通ずる「從」字不読の例が存した可能性がある。大きな視点からの傾向としての歴史の鳥瞰的把握—日本語の歴史の方向性のイメージ—と言う大義からすれば、右の平安後期点における不読例は、孤例で用例数寡少な故に、例外として切り捨てられかねないが、切り捨ててしまつて良いほどに小さな問題なのであろうか。

鳥瞰的とも言うべき言語変化の歴史の大括りな概括では、「平安初期の訓読語（または、訓読法）は、当時の日本語として自然である語法・表現等を採用する。例えば、平安初期の訓読法は、文末に於いての表現が多様・多彩で、訓読語表現としての表現性が、平安中期以降の訓読語に比べて高い」とか、「平安初期の訓読は、特定の一漢字に対しての対応和訓は、複数のものが存して、それを文脈によつて使い分け、日本語として自然な表現を採るべく運用されるが、平安中期以降の訓読語においては、特定の一漢字に対して和訓が限定され固定して、平安初期の表現性に比べれば、表現の幅が狭くなり、画一化していく」などと纏められてきたように思われる。

確かに、このような傾向があることは否定はしないし、それで説明の出来る言語事象も多いのは事実であるが、訓読語の全てをかかへる歴史的变化のイメージで包括的に捉え切れるかと言えば、本稿に

掲げたような例外と言うべき事象が、存在する可能性を認めねばならない。孤例であるので、確例の採取を第一の課題として後に委ねねばならないが、今後の研究の進展の方向としては、一方的な流れのみではなく、右の概括的な把握に相矛盾する、例外として切り捨てられてきた言語事象の存在を掬い上げ、これを訓読語の歴史の中で正統に位置づけ、立体的な訓読の場の言語表現の歴史を再度組立て直す必要に迫られていると考えるべきである。かかる視点からの研究の果たすところは、言語生活史の叙述の組立て直しに他ならぬ。

次に、「而」字を取り上げてみる。仁和二年点においては、「而」字は、不読とされたと思しい例が夥しい。

14、世尊 不空成就如來の左邊の月輪返に依りて而住して此の温陀南を説かく（巻第二・仁和二年点）

の如く、加点が無いのが普通であるが、

15、世尊 金剛摩尼峯樓閣の金剛門の中の月輪返に依りて而住して（巻第二・仁和二年点）

の如く、接続助詞「て」を「依」字に読み添えているから、「而」字は、接続詞「シカウシテ」に読んだと思しき例が例外的に存する。また、

16、四の線を（し）而交絡し 繪綵と鬘と花嚴せよ。（巻第二・仁和二年点）

とした例があつて、「而」字は「て」と直読されたと思しいが、用例は多くない。つまり、仁和二年点においては、「而」字は不読が主で、纔に接続詞・接続助詞直読訓が認められる。一方、平安後期

点では、

17、世尊金剛摩尼峯樓閣の隅の左の邊の月輪(返)に依(り)て「而」住(し)ぬ。(巻第二・平安後期点)

とした、仁和二年点と同様の不読例が認められる。巻第三(仁和二年と推定した薄朱の訓点の密度が低く、仁和二年の用例としての確例が、多くは拾えないが、平安後期の宝幢院点は、ヲコト点を中心であるが全巻に亙つて加點されて平安後期の用例として確認することが出来る)にも、不読例が散見される。仁和二年点にも認められる例としては、

18、世尊不動如來の曼荼羅ノ左の邊の月輪(返)に依(り)而住(す)。(巻第二・平安後期点)

19、世尊金剛摩尼峯樓閣の寶眉間の月輪(返)に依(り)て而して「而も」住して(巻第二・平安後期点)

など、接続助詞「て」や接続詞「シカウシテ」の用例も確認される。仁和二年点においては確認されない接続詞「シカモ」の例も存して、

20、世尊不空成就如來の左邊の月輪(返)に依(り)て而も住(し)ぬ。此(の)温陀南(を)説(かく)。(巻第二・平安後期点(用例7と同一箇所))

用例19の異読例などにも認められる。

右に掲げた「而」字の用例は、用例16を除いて皆、同様の構文であるが、「而」字の訓読には変化が認められ、平安後期点において表現の幅が増す。仁和二年点と平安後期宝幢院点の訓読語の違いは、語種の問題としては、平安後期点には、仁和二年点に現れない「シ

カモ」訓が確認される。むしろ、量的な傾向として、仁和二年点には不読例が圧倒的であるのに対して、平安後期点も不読例が存するものの、「而」字に加點された例が大半を占めるのであつて、この点に、通時的な差を認め得る。ただ、ここでも注意すべきは、平安初期の訓読法は全て、平安後期の訓読法のバリエーションに含まれていると言ふことであらう。即ち、平安後期においての方が、用法は豊富である。かかる変化は、時代の流れとされてきた訓読語の画一化、単純化では、説明しきれない事柄であつて、例えば、語や文の接続関係を明示する機能を持った語が顕現している事と捉えれば、文章表現は、論理的な方向性を強めていると認めることが可能であらう。

なお、「而」字の訓読のバリエーションは、金剛頂瑜伽經の漢文脈の性格に拠っていると判断されるが、逆接の接続詞は出現していない。この点も、後節に触れるが、訓読語の使用を予め制限する原漢文のありようを考慮して記述する必要がある。

以下、助字に関する記述を更に重ねる。続いて、「則」字を取り上げてみる。当該資料において、「則」字は、以下のように訓読される。ヲコト点によつてではあるが、以下の確例が拾われる。文中に使用された例で、

21、結(むす)に由(り)て集(り)たてまつりて則(ち)喜(ひ)たまふ。(巻第二・仁和二年点)

とあつて、ヲコト点「ち」の加點が存する。これ以外は、

22、一切虚空界(返)に量遍(して)則(ち)一切如來の羯磨界(の)

故(に) (巻第二・仁和二年点)

の如くであつて、「則」字には、一切の加点がない。平安後期宝幢院点も、一切加点が存しない。文中例、

23、一切虚空界(返)に量り遍(く)して則(ち)一切如來の羯磨界の故に(巻第二・平安後期点(右と同一箇所))

文頭でも、

24、則(ち)一切如來金剛(の)名(を)以て金剛毗首(返)と號(け)(巻第二・仁和二年点)

25、則(ち)一切如來金剛の名(返)を以(て)金剛毗首(返)と號(け)たまふ。(巻第二・平安後期点(右と同一箇所))

と訓読される。この「則」字は、仁和二年点では、例21の確例一例が存するが、巻第二・巻第三を通じて、平安後期点には、一切の付訓・加点がなされない字と扱われて例外がない。この「則」字の訓読法を、結論的には「スナハチ」の直読例と指定した。但し、当該資料は、既に説いたようにヲコト点主体の資料である。平安後期の宝幢院点も、これに対応する片仮名訓点は、限られたものである。「則」字については、平安後期の宝幢院点も、ヲコト点の加点すらない状況である。かかる状況を如何に解釈するかには、数通りの解釈が可能で、些かの主観的なものが入らざるを得ないことを予め断つておくが、資料全体を通じて仁和二年点に孤例である、ヲコト点「ち」の加点があることを以て、「則」字直読として扱った。以下は贅言に属しようが、積極的に不読であることを示す記号・符号類は一切存しない。この直読の扱いに、孤例のみが直読であつてわざわざその

事を示すための唯一の加点であるとか等その他、反論は種々予測される所であるが、ここで強調しておきたいのは、右にも述べた如く、仁和二年点においても、また、平安後期点においても、加点上の扱いは概して同等であると言う事実である。一般に、仏書における「則」字の直読例は、平安後期の他資料には、普通に見いだすことができ(1)る事象である。消極的にはあるが、平安初期と平安後期の訓読法が同一であつた可能性が高いと判断する。因みに、「即」字は、両点とも加点の確例がない。

さて、本節では助字の訓読法を中心として取り上げているが、例えば、漢文における文末の助字は、漢文の文章表現においてモダリティを支配する場合が多い。その表現の有り様を、日本語表現として如何に訓読するかと言う課題に対応して、訓読語の変化、あるいは、幅が規定されよう。原漢文の文末表現の多様さに対応して、訓読語の表現も多様さを見せるものと考えられるが、金剛頂瑜伽經の場合の原漢文には、出現を見ない文末助字が存して、他と比較できない場合が存する。例えば、大正新脩大藏經テキストデータベース(大藏經テキストデータベース研究会(SAT)、<http://21dzk.lukyo.ac.jp/SAT/>、平成二十一年十月二十六日現在検索)の「金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經(886、不空譯)」について、「也」字の検索を行うと20例のヒットが有るが、Footnoteに5例、残りの15例は、いずれも陀羅尼中の用字であつて、そもそも漢文本文には出現しない。「焉」「矣」は、漢字自体が存しない。「乎」は、Footnoteに1例のみ、「歟」も出現がない。「之」は、11例の

ヒットがあるが、連体の助字として7例、反切の用字として1例、Footnoteに1例、文末助字「之」としては、2例のヒットがある。石山寺蔵金剛頂瑜伽經卷第三に存するもので、仁和二年薄朱点では訓読が確認できないが、平安後期宝幢院点では、

26、係(返)を加(へ)て用(ゐ)、之を呼(ふ)應し。(卷第三・平安後期点)

27、彼(の)所樂(返)に隨(ひ)て之を説(く)應(し)。(卷第三・平安後期点)

と、共に代名詞訓を与える。「耳」も文末には現れないし、「而已」の連文なども出現しない。

一般に、顕教系の資料を中心として形作られてきた平安初期訓点資料の文末表現のイメージは、後世画一化する文末に対して、読添語も豊富で、多彩であると説かれてきているが、本稿で対象とする金剛頂瑜伽經では、そもそも、右に例示した如く、原漢文の文末表現が単純で、これと対応するかの如く、平安初期訓点資料に特徴的と言われる文末表現の豊かさが追認できない。その意味では、仁和二年点においても、また、時代を隔てた平安後期点においても、訓読の質にさほどの変化が認められないことになろう。

即ち、原漢文の訓読語表現に対する支配という視点での検討が、今後必要とされよう。

#### 五、金剛頂瑜伽經仁和二年点本の再読字

石山寺蔵金剛頂瑜伽經仁和二年点本は、卷第二と第三の二巻が伝

えられているが、金剛頂瑜伽經の原漢文自体が、事相に関する記事が中心で、方書的で、曲折の多い文章ではないことの一端は前節に触れた。以下、代表的な、所謂、再読字について検討を行ってみる。前節にも使った大正新脩大藏經テキストデータベースの「金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經(0865、不空譯)」について、所謂、代表的な再読字を検索してみると、「宜」字は、検索数は0である。「將」は、検索数1例であるが、Footnoteに現れる。「須」は、検索数2であるが、「須彌盧頂金剛摩尼寶峯樓閣」と「刹那攞嚩須臾頃」と現れて、訓読語の副詞とか助動詞が当たる用字ではない。「且」は、検索数1で、「次當且先以四禮。」と現れる。「未」は2例。「未曾有」と「未知」として現れる。「猶」は、検索数5であるが、Footnoteに2例、「猶如胡麻」(2例)と「猶如遍修功用」とあって、本文中3例が連文「猶如」として出現する。

「當」字は、28例がヒットする。この内の一例は、Footnoteに現れる。訓読語では、実動詞として二格を取ると思われる例、「即前金剛合掌當心以頂著地」や「先當金剛縛推拍自心誦心眞言曰」の如くの動詞としての用字が四例がある。「應」は、検索数67が現れる。二例がFootnoteに出現する。

右の検索結果は、不空訳の「金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經」の用字を視点としてみると、漢文の文体の有り様に関する問題が存するように認められる。原漢文を基に訓読される訳であるから、訓読語の基底的な前提としての制約として、まず、漢文がある。

この漢文の文体(用字)が問題で、「金剛頂一切如來眞實攝大乘現

證大教王經」には、「當」「應」両字は、右に掲げた用例数が使用されているが、一方、「宜」「將」「須」「且」「未」「猶」(当該字の再読訓法の成立は時代が降ると説かれている)「字」に関しては、殆ど出現しない。これら出現の多寡は、再読字の成立事情として考えられる状況に、少なからず影響を与えるであろう。再読字の成立は、平安中期(十世紀)からであると説かれてきた<sup>13)</sup>。そもそも再読字の成立は、平安初期における「當」「應」や、「將」「未」などが、副詞訓かまたは、サ変動詞、助動詞訓を与えられて、文中で単読されていたものが、副詞と文末との呼応関係が定型化したため、一字に対しての二度読みが定着したとした過程を考えると出来る。定型化するためには、多出して、しかも、時間と共に文末の表現が狭められ、形式が単純に成つていく過程が必要であろう。再読字の成立は、本質的には一字に対しての加点上の表記の問題―読み下し文を讀み上げられる場合は、再読か否かは、講説など耳で聞いては確定できない―と、文章としての漢文訓読表現の文末の単純化の問題であろうと考えられるが、再読字に相当する用字の用例が乏しい原漢文に対する訓読と言う言語環境下では、再読は生じ難いことになる。即ち、定型化するだけの使用実例の量が必要となる事柄で、「當」や「應」字を措いて、他の字に関しては、不空訳の「金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經」の如き漢文体を有する資料を母体としては、再読の訓読法は生じにくいこととなる。

以下、同様の分析を、二三の密教関係書を取り上げて行つてみる。同じく不空の訳にかかる事相書である儀軌を取り上げてみる。「金

剛頂蓮華部心念誦儀軌(0873、不空譯)では、「當」字は21例存する。「應」は52例がヒットする。一方で、「宜」は0例、「將」も0例、「且」も0例、「猶」も用例がヒットしない。「須」では、1例のヒットがあるが、「次想須彌盧」とある用例で、副詞や助動詞訓に当たるものではない。「未」は3例が出現して、副詞訓、あるいは、助動詞訓の該当用字である。

同じく不空の訳である「金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌」(1199、不空譯)では、「當」が5例、「應」が8例のヒットがあるが、「宜」は0例、「且」も0例、「猶」には5例のヒットがあるが、内1例はFootnoteで、他4例は「水火俱散開猶如蓮華葉」の如く、「猶如」として現れる。「將」は1例がヒットするが、「亦皆能將來」とあつて、訓読語では複合動詞訓が充当されるとも理解される。「須」は3例がヒットする。1例は「便即須割取執之」とあつて動詞に前置されるが、その他の2例は、「若所須宮觀皆悉能成辦」などとあつて、動詞訓が充当されると思しき用字である。「未」は、2例のヒットがあつて、動詞に前置される構文で現れる。出現する用例の全体が数量的に多くはないが、それでも「當」「應」字には、用例があるものの、「須」「未」に、動詞に前置した副詞訓または助動詞訓充当例が纔に確認される以外は、漢文本文に現れない。

法全の手になる「大毗盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌供養方便會」(0852、法全撰)では、「當」字は、動詞も含むが54例ヒットする。「應」も32例を数える。また、「未」字は、12例が出現する。「猶」は、26例ヒットするが、内、「猶如」「猶若」

とFootnoteを除けば、13例存在する。一方、「宜」は3例のヒットがあるが、1例は、Footnoteで、のこり2例は陀羅尼中の反切上字として現れる。「將」は2例がヒットするが、いずれも「金剛將菩薩」として使用される。「須」は2例有つて共に「目連須菩提迦葉舍利弗」とした固有名詞中で使われる。同じく儀軌であつても、不空訳の儀軌類と出現状況に差があるが、「宜」以下の字については、再読構文での使用がない。

「大毗盧遮那成佛神變加持經」(0848、善無畏 一行譯)は、善無為、一行訳の書であるが、この書では、「當」が<sup>326</sup>例、「應」は<sup>239</sup>例ヒットする。「未」字は、32例のヒットが確認される。「猶」は55例のヒットがあるが、「猶如」の出現も少なくない。「宜」は全5例がヒットするが、1例はFootnoteに現れ、1例は「如是等好相宜應諦分別」のように「宜應」の文字列で出現する。1例は、Footnoteに対応する箇所で「非是所宜」とあるが、連用修飾を果たしている用字ではない。更に1例は、陀羅尼中であつて、割書で反切を表記した「宜以反」と現れる。残りの3例中2例は「善觀時宜所當作」とあり、1例は「依於地分所宜處」とあつて、同様である。即ち、「宜」の再読に該当する用字はない。「將」は0例、「須」は3例のヒット中2例は「須彌」、1例は「次說漫荼羅所須次第」とあつて、動詞の用字でるとみとめられ、再読される用字での使用がない。「且」は0例である。

同じく密教經典である輸波迦羅訳の「蘇悉地羯羅經」(0893、輸波迦羅譯)を例に取れば、以下の如くである。「當」字は579例がヒッ

トする。「應」字は、<sup>258</sup>例のヒットがある。「將」字は、33例が存している。「須」は<sup>362</sup>例、「未」字は51例、「猶」は31例がヒットして、連用修飾に立つ用例が拾える。一方、副詞訓が与えられる条件にない、あるいは、連用修飾に立つ構文が極めて少ないのは、次の二字である。「宜」字は14例ヒットするが、Footnoteに2例、「宜當」の連文が3例、反切注の用字が3例であり、残りの用例は、連用修飾に立つ例ではなく、述語に相当していると思しい。「且」は4例のヒット中、3例が「且如諸天之中亦有貧者」の用例で、1例のみが「初且誦其眞言」とあつて、連用修飾に立つ。

一行の筆記になる「大毗盧遮那成佛經疏」(1796、一行記)の場合には、「當」は<sup>439</sup>例で、「應」は<sup>709</sup>例存する。この二字に比べれば、用例数は少ないものの、「宜」は43例のヒットがあり、「將」は96例、「須」は179例、「且」は53例、「未」は379例、「猶」は459例のヒットがある。

右には、金剛頂瑜伽經を中心に、数点の密教經典における、所謂、再読字の出現、用字を確認してきたが、諸書においての状況は様々であると結論できよう。傾向的には、事相書である方書の儀軌類は、「當」「應」字の出現が確認されるものの、取り上げた「宜」「將」「須」「且」「未」「猶」の出現は稀である。やはり方書の側面を持つ金剛頂瑜伽經、大日經も、通ずる傾向が見て取れるが、方書的文章を含む蘇悉地羯羅經は、これとは異なつた様相を示している。

大日經疏においては、右に取り上げた各字の用例の多寡はあるものの、連用修飾の用字が纏まって確認される。

以上の記述を通じて、密教經典という範疇で、再読字の問題を対

象に検討を加えようとする場合、諸種の問題が浮かび上がったものと判断する。再読字の出現の状況は、まず、記載された内容によって左右される点が存することである。方書（供養の作法書）である儀軌には、処方のための義務や命令の必然性を指示・表現する用字と認められる「當」「應」などが多用されるのには、必然性が有るように認められる。

また、右に加えて、原漢文の、漢訳者の文体的な個性の問題も絡んでこよう。従来は、こうした原漢文の用字の問題を措いて論じてきたように思われる。一資料を一つの言語事象の完結体と見れば、資料間における差異を念頭に置いて言語事象の処理を考えねばならない。即ち、儀軌類を取り上げて再読字の問題を論じようとする場合、「當」や「應」についての用例は、求めやすい故に、論述の対象として取り上げることが出来る。一方で、右に取り上げた「宜」以下の諸字については、そもそも用例そのものが求めがたい、あるいは、存在しないのであるから、再読の訓読法が存したか否かは、不明として保留せねばならぬ理屈となる。

再読字については、反論もあるが、平安中期初頭以降の資料に色濃く出現すると認められる。従来の論述が、平安初期を一共時態として扱い、平安中期も一共時態と扱って通時的に論じられてきたが、平安初期（また平安中期）の共時的状況、即ち、位相として複数の言語集団が併存したと見る所から出発すれば、時代の共時態の如何なる部分において、あるいは、極論すれば誰から発生したのかと言う課題が設定できる。再読訓法の成立母体を、いかなる共時的言語

集団であると考えerかの糸口は、あるいは、日常的に事例として多くの、所謂、再読字構文に接していたところに求めることが出来るとすれば、原漢文の分析は、推論を立てる一つの方法となりうるかも知れないが、今後の課題として措くこととする。

右の検索結果は、不空訳の「金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經」の用字を視点としてみると、漢文自体の漢文体の有り様に關する問題が存するように認められる。原漢文を基に訓読される訳であるから、訓読語の基底的な前提としての制約として、まず、原漢文がある。この漢文の文章体（用字）が問題で、「金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經」には、「當」「應」両字は、右に掲げた用例数が使用されているが、一方、「宜」「將」「須」「且」「未」「猶」字に関しては、殆ど出現しない。これら出現の多寡は、再読字の成立事情として考えられる状況に、少なからず影響を与えるであろう。再読字の成立は、平安中期（十世紀）からであると説かれてきた。そもそも再読字の成立は、平安初期における「當」「應」や、「將」「未」などが、副詞訓かまたは、サ変動詞、助動詞訓を与えられて、文中で単読されていたものが、副詞と文末との呼応關係が定型化し、一字に対しての二度読みが定着したとした過程を考察することが出来る。定型化するためには、多出して、しかも、時間と共に文末の表現が狭められ、形式が単純に成つていく過程が必要であろう。再読字の成立は、本質的には一字に対しての加点上の表記の問題——読み下し文を読み上げられる場合は、再読か否かは、講説など耳で聞いていては確定できない——と、文章としての漢文訓読表現の文末の単

純化の問題であろうと考えられるが、そもそも再読字の用字が乏しい原漢文に対する訓読と言う言語環境下では、再読は生じ難いことになる。論述が前後するが、増して、次節に記述した如く、当該資料である金剛頂瑜伽經仁和二年点においては、用例の存する「應」字は、助動詞「ベシ」の単読と見て例外がないし、「當」字は、単字の場合は助動詞「ベシ」訓で例外がなく、(平安後期点の状況からは「應當」「當應」の共起の例においては副詞訓「マサニ」を採つて例外がなく) 整然と読まれて混乱がない。

言語変化の恒であるが、変化の原拠が、言語表現の混乱に有る場合がある。用例の多出と共に、漢文脈上の同一の「當」「應」字が、時には助動詞訓を採り、時には副詞訓を採つて混乱が存する故に再読が定着したと言つた経緯が考えられよう。平安初期において同一漢文に複数の訓読が併記されるとか、幼少時の訓読語の学習、習得時の混乱であるとかを想定すれば事態の成立が理解され安いであろう。稿者の耳底には、かかる想定は、空想でしかないとの批判が聞こえてくるが、要するに即ち、定型化するだけの用例の量が必要となる事柄で、漢字一字に、二度の読みが定着するには、それだけの言語変化を起こすべき、量的な力が必要であろう。金剛頂瑜伽經仁和二年点の如き、用例自体が少量であるとか、また、整然とした訓読法が実行されているような共時的な言語集団、言語資料においては再読字の成立への力学は存在しないと断じることが出来よう。更に、付け加えて誤解の無いようにと考えるが、以上の論述は、平安初期の天台宗という共時態においての再読字の成立を否定する訳で

は無いことを断つておく。即ち、平安初期天台宗において、諸種の言語集団が指定できるのであつて、当然、華嚴経や法華経を中心とする顕経系の集団も、密教系の集団も、浄土系や天台禅系の集団も、あるいは修験道関係も存した訳であろうから、この点に意を注いでおく必要がある。

#### 六、石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本の再読字の訓読

以下には、前節の検討から、石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本の、所謂、再読字について、仁和二年点の状況を、「當」「應」字を取り上げて記述・検討する。

石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点の卷第二の白点、卷第三薄朱点には、本文の私読を基に、第一節において帰納した通りであるが、仮名点の加点は、ごく稀である。ヲコト点を中心としての記述となるのは助字の場合と同様である。再読字「當」は、仁和二年点の訓読において、以下の通りに現れる。

28、次に我れ遍く説く當し (卷第二・仁和二年点)

29、次(に)且(く)先(つ)四礼を以て一切如來を礼(す)當し (卷第三・仁和二年薄朱点)

右のごとく「當」字が単独である場合、助動詞「ベシ」に単読されて例外がない。平安後期宝幢院点においても同様で、

30、印(返)に住して則(ち)起して「於」諸方を願(視)す當し。(卷第二・平安後期点)

31、觀(し)已(り)て「於」地(返)に住して則(ち)伏藏を見



(る) 當し。(卷第三・平安後期点)

とあって、助動詞「ベシ」の単読である。平安後期点においての訓読法は、平安初期仁和二年点と等しい。仁和二年点では確認されないが、平安後期点で、「當」字に、副詞訓「マサニ」が出現するのは、「應」字と共に起る場合で、卷第三には、

32、當に自身と觀(す)應し。(應當觀自身) (卷第三・平安後期点)

33、汝常に當に而(し)て受持す應し。(汝應等而受持)

(卷第三・平安後期点)

とあって、「當」字は、副詞訓單読で読まれている。

「應」字は、再読訓法の成立が、「當」などよりは、遅れると説かれる再読字であるが、この「應」字も、平安初期仁和二年点においても、また、平安後期宝幢院点においても単読で、助動詞「ベシ」訓が与えられて例外がない。仁和二年点では、

34、教(返)の如く「於」曼茶羅の中に安坐す應し。(卷第二・仁和二年点)

和二年点)

35、此(の)金剛界大曼茶羅(に)入(る)應し

(卷第三・仁和二年薄朱点)

の如く出現し、平安後期宝幢院点においても、右の例と同一箇所、単読で「ベシ」訓が与えられ、また、

36、思惟して加持す應し。(卷第二・平安後期点)

37、善く思惟を作して大印をして成就(せ)令む應し。

(卷第三・平安後期点)

とあって、仁和二年点と同一であることに矛盾がない。

ここに、平安初期の訓読法と平安後期の訓読法が同一であることが注目される。かかる状況が、平安後期の天台宗山門派において厳然と存在していたことを明確に意識せねばならない。即ち、平安後期天台宗山門派の訓読語には、事象として、一般に認められる平安後期の訓読法を採らず、平安初期と同様の訓読法を保守した言語活動が厳然と存在していたことを、明確に認識しておく必要がある。

七、本稿の検討に見える漢文訓読語史の問題点

本稿においては、石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本に存する、平安初期仁和二年加点点と認められる天台宗関係の第一群点と平安後半期(平安後期)に加点点された宝幢院点の訓読法の比較を行って来た。その結果、以下の事が認められた。

一、副助詞「イ」や「者」字の訓に関して、金剛頂瑜伽經仁和二年点には、平安初期語法が確認され、これらの事象については、平安後期点において、平安後半期的な訓読事象に変化した例が認められる。

一、平安中期以降、漢文訓読語に出現するとされる副助詞「ら」が、平安初期の他資料に先行して仁和二年点に出現している。

一、助字の訓法を検討すると、平安初期仁和二年点において不読傾向にあった「從」字の訓読は、平安後期点において直読されることが殆どであるように変化するが、不読用法も残していた可能性がある。

一、「則」字の訓読は、仁和二年点と平安後期点において同一の

扱いをされて直読されている。

一、「而」字の訓読は、仁和二年点において不読の用例が目立つが、平安後期点においては直読例が多くなり、与えられた訓も平安後期点において語種が多い。

一、所謂、再読字の訓読法は、「當」「應」字について、平安初期仁和二年点は単独、平安後期点も単独と同一で再読しない。

さて、右の記述の評価を、日本語史の観点から与えようとすると、どのようなことになろうか。

日本語史（国語史）の研究は、第一義的には、特定のある言語事象が、いつ、どういう共時的言語環境下（どういう言語集団、あるいは、個人において）で、どのように変化したのかの記述研究を出発点とする。更に、帰納的方法を用いて行った記述研究が明らかにした―飽くまで、思索の出発点である―事柄を、法則としての言語変化と捉えて、その法則性の実態を説明するところにある。以上の基礎学としての研究からの進展は、変化の力学への抽象化、即ち、如何なる言語的な力、あるいは、言語外的な力に依って日本語が変化せざるを得なかったのかの解明に進むべきであろう。更に、人間学としての日本語史の学問の深化の方向を模索すれば、そこに過去の人間の思考活動の実質を描き出して、「人間存在の本質とは何か」と言う哲学的課題への答えに繋がるべきであろうと愚考する。

日本語史研究の潮流の一つとして、記述的研究に重きを置く、あるいは、右に掲げた言語変化の力学への言及以下の事柄は、「帰納的実証性」に希薄な、謂わば、観念論―実証性のない解釈―であつ

て、これに踏み込む事は、人文科学としては、不適当なもの、科学からは逸脱するものだと厳評を下す研究者の流れがある。こうした学問的価値観を否定するつもりは毛頭ない。日本語史研究が、この厳密なる態度による記述研究より発すべき事は、右に説いただけで十分の理解が得られるものと考ええる。

ただ、こうした厳密なる帰納的記述主義の狙うところは、《言語変化》である。即ち、変化したことへのみの関心となりかねない。同じ視点、方法による日本語の歴史の帰納的記述主義において、従来説かれてきた実態的な歴史的イメージを否定し、先行研究を乗り越えた新しい研究を展開を目指すとするれば、帰納的記述主義の枠内での研究においては、第一には、日本語史料の密度を増す事であろう。ある共時態の日本語史料を博搜して、従来説かれていた変化の時代を引き上げるとかの方向である。こうした研究の方向での新説は、その構築が可能であろうが、―以下は感想に過ぎないが―これだけの日本語史のパラダイムを書き換えられるかは、心許ないのではなからうか。帰納的記述絶対の硬直した見方が、「日本語史研究は、従来の研究に加えて、今後やるべき事が、果たしてまだ、残っているのか」とした、不当な発言に繋がる。

右の第一点目の批判から、同じ方法に立ち、論説の立脚点の点検無しに、方法論の開拓に心を注がぬまま、ダイナミックな研究を目指すとするれば、新しい日本語史料群の発掘と言う方向に必然的に向かう事となる。

右の二つの視角は、帰納的実証法を金科玉条にして、それからの

方法論的な進展深化を考慮しない、あるいは、「無批判な切り捨て思考」によるものであつて、かかる研究者の思考は、水平的に拡張する方向しか持たない。つまり、資料を悉皆調査すると言ふ、非現実的な理想を求めめる教条主義であると断ぜられる。研究の現状を鑑みれば、平安時代の一期、例えば、平安後期、ほぼ十一世紀の百年間でもよいが、現存する日本語資料を―訓点資料と言ふ資料分野だけでも良い―個人の学問的良心と責任において生存中に調査し尽くす事は、まず、不可能である。

もう少し、研究の本質的な問題として考えてみよう。右の如くの帰納的記述研究のみに、日本語史の学問の眞の存在を認めて、究極の研究目的が言語事象の変化の年代の解明だけを目的とするが如きは、なぜ人文科学―即、人間学―の枠組みにおいて行わねばならぬのであろうか。稿者の謂わんとするところは、かかる帰納的記述研究は、事象事実の解明として日本語史研究には、出発点として必須の要素ではあるが、これのみに収束するものではなく、人間学としての日本語史学の達成に、研究者は、垂直的深化思考をもつて臨み、更に、人間探究に進むべきであると言ふことである。かかる深化の方向性の意識を持たぬ研究は、「謂わば、即物的な研究であるとか、人間学としては不十分なる研究である」との批判に応えることはできないであろう。

次には、日本語史の法則性を求める研究についてである。右の意識に比べれば、遙かに抽象度の高い研究であろう。右の記述研究を元として、変化のシステムを解明する如きの研究である。ここに説

くまでもないが、「唇音退化」の法則は、本質的部分での人間の性向などの理解が描き出されるものと解釈されてきた向きがある。また、例えば、動詞活用の研究は、江戸時代にほぼ完成を見た非常にシステムティックな研究として、学史上評価されるべきところであるが、近代以降には、この動詞活用の歴史的变化・変遷が問題とされてきた。システムとして如何に変化をしてきたかの問題は、長じた人間の無意識に存する文法システムの解明であつて、言語活動の前提となる事象の解明である。また、五十音図なども、一般には、日本語の清音音節における―音韻あるいは―文字の体系表で、これもシステムティックに日本語を理解する無意識での拠り所となつている。こうした研究は、人間の認識の問題を射程としたもので、遙かに人間存在に寄り添つた研究として評価されるべきところである。

語意論や意味論研究などは、もつと直接的に、人間認識、例えば、外界の分節に関する解明であるとか、直接、人間存在に関する研究に結びつくものである。

先に批判した帰納的記述研究だけの段階を研究の全てとして、これより出る事を許さない日本語史の旧態然とした学問観において、学問の至上命題である、「複雑なる実態を整理して、より単純なる像(イメージ)で把握しよう」と指向すれば、結局のところ、日本語の変化だけに目が向きがちとなる。つまり、ある事象が、いつ変化したか、いつ生まれたかの、所謂、変化の事実だと解釈し、思い込んでいる事柄の記述である。資料の博搜に依つて得られた事象の記述研究は、研究者の認知する限りにおいての最古例であつて、即、

言語変化の事実とスライドして簡単に認められる事柄ではなく、研究上操作に依って導き出された実証の限りであるという反省を持たねばならない。が、もっと大きな問題は、今も、また過去も、人間の営為としての言語の変化は、従来の研究の成果即、何年何月の某資料に、新しい変化語形が現れるとかの事実的記述に基づいて、さらに発展したところで、文化史的言語生活史の視点による腑分けが必要であり、そうした方向に踏み出すべきであろう。即ち、日本語の変化は、現在も過去も、新たなインパクトのある表現への移行に働く力と、保守的とも言える言語規範を守ろうとする力との綱引き拋るものであろうから、人間の営為としての日本語史を描こうとすれば、この両方の力関係を、当時の言語生活に即して、具体的に位置づけ、評価してみる必要があることになろう。

右に記述してきた石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本における二種の訓点の訓読法の比較は、平安後期加点と思しき訓読法において、変化形と認められる事象も、確かに存在して、通時的変化が跡付けられる事象があるのも確かである。副助詞「イ」、「者」字の「ヒト」訓、「從」字の不読、直読の用例量の変化の問題は、正に、変化を如実に示した例である。しかし、「則」字、「當」字、「應」字については、訓読法の変化が確定できない、あるいは、変化していない事象である。即ち、かかる言語事象は、平安初期仁和二年点と、平安後期宝幢院点の訓読法は、変化がないと見るべきである。一般に、所謂再読字の再読訓、再読表記の事象は、平安中期に変化が起こり、以下、一般的になると認められてきた言語事象である。当該資料は、天台

宗関係の平安後期の資料にあつて、そうした集団の中に、平安初期の訓読と変わりない訓読が、行われていたことも事実として存在したことに注目すべきである。即ち、変化した新しい訓読法を用いない密教関係資料群が、平安後期の天台宗内に厳然と存在している事実に目を向けるべきであるし、更には、かかる実態の持つ日本語史的な意義を、言語生活史の中で説かねばならない。

また、抽象化した歴史的記述において掛かる実態を考慮しないとすれば、例えば、当該資料の平安後期点の現象が、例外的なものであるとの解釈がされるかもしれないが、この場合、何故例外として切り捨てるのかと言う事の説明を、実証的方法で行う必要がある。

平安初期の事象を、平安後半期に天台宗で行っているのは事実であつて、この事実は、既に指摘され、問題とされてきた平安初期の訓読の移点の問題とも関係しよう。平安後期に理解言語のレベルであつたとしても、実際に、平安初期の言語事象が出現しているのは、紛れも無い事であつて、やはり、共時的に平安後期に並存したとみるべきである。

当該資料の如き場合は、平安後半期の天台宗山門派と言う共時的言語集団において、所謂、古い訓読法が並存した例であつて、天台宗山門派も、更に、小さな共時的言語集団を設定して腑分けするなどの方向で、かかる資料の言語実態を抱え込んでの立体的言語生活を描き直す必要がある。即ち、平安後半期の天台宗山門派には、所謂、新旧の言語事象が並存しているのであつて、この事実を言語生活史の一部として、文化史、あるいは、宗教史の視点を加味しながら

ら、当時の天台宗山門派における言語意識史の問題として捉え直す必要があると考えるのである。要するに研究者には、これらの視点から、新旧の言語事象の並存―変わろうとする言語の力学と引きとどめようとする規範的意識の相克―を叙述せねばならない義務が生じることとなる。

その問題は、共時態を細分化して、宗教史学等との融合的発想に依つて説明されるものかも知れないし、更に、究極的には、言語主体としての個体の文体の問題に帰するかも知れない。特に、言語の個体史―言語主体の個体としての言語の歴史―の観点は、いままで、希薄であつたと評価せざるを得ない視角であつて、今後の大きな課題であろう。即ち、大局的な言語変化については、日本語史として描かれてきているが、その歴史の中に、言語を實際に担い、運用した個人があつて、その個人にも習得（漢文訓読の教育の場）から運用（言語の表現活動の場）に至る日本語の遍歴があるわけであるから、両視点を取り入れた上での、立体的歴史を描く必要がある訳である。

以上のような理由から、本稿で取り上げた石山寺蔵金剛頂瑜伽經仁和二年点本における平安後期宝幢院点の言語事象が、平安初期のものに通ずると言う事実は、蔑ろにされるべき様な小さな問題ではないことが明白であろう。

### おわりに

聊か理の勝つた論行となつた反省はあるものの、現在の史料発掘

状況からは非常に稀少である平安初期の密教經典の加点を軸に考えてきた。右に取り上げ記述した事象の重要性は、十二分に理解されたものと判断する。今後の研究の進むべき方向についても取り上げたものであるが、十二分に論じ尽くしているとは到底思えないし、抽象的であるという誹りもあろう。実践を行いつつ、本稿に説いた方向性の修正を目指したく、今後の課題とする。

なお、本稿は試論の域を出たものではないとの自覚があるところで、特に、新進の研究者諸兄の批判を切に願うところであつて、多くの反論を、期待を込めて念じている。

### 注

1、築島裕『平安時代訓點本論考 研究篇』（平成八年五月、汲古書院）第一部第二章。

同『平安時代訓點本論考<sup>ラコト点図</sup> 仮名字体表』（昭和六十一年十月、汲古書院）の五三八・五三九頁に、本稿に取り上げた金剛頂瑜伽經仁和二年点所用の片仮名字体表とラコト点図が掲載されている。また、築島裕博士は、『石山寺の研究 一切経篇』（昭和五十三年三月、法蔵館）における研究篇「石山寺経蔵の古訓点本について」において当該資料の略説とラコト点図を掲げていらつしやる。本稿において、稿者が帰納したラコト点図とは、出入りが存する。

2、築島裕『平安時代訓點本論考 研究篇』（平成八年五月、汲古書院）、第三部第五章。

3、築島裕『平安時代語新論』（昭和四十四年六月、東京大学出版会）第二編第一章。

4、石山寺蔵金剛界儀軌寛平元年点にしても、石山寺蔵金剛界儀軌天永三年点本にしても、平安初期の訓読を伝える加点箇所は、陀羅尼部分に偏つ

ている。金剛界儀軌の漢文部分がどのように扱われたかについては、一考を要する所である。

- 5、中田祝夫「古点本の国語学的研究 総論篇」（昭和二十九年五月、大日本雄弁会講談社）。

注2文献。

- 6、中田祝夫・注5文献。

同編「古本点図集二種」（私家版）

築島裕編「点図集（稿本）」（昭和四十四年六月、私家版）

注2文献。

- 7、注2文献。

- 8、例えば、箕面学園蔵の妙法蓮華経方便品天長五年（八二八）頃点は、

築島裕・小林芳規「故山田嘉造氏蔵妙法蓮華経方便品釈文」（『訓点語と訓点資料』第七輯、昭和三十一年八月）

大坪併治「『妙法蓮華経方便品第二試読』（同右）

同一輯の学術雑誌掲への載例としてよく知られている。

- 9、訓読文の異同は、訓点の帰納結果の異同のみならず、該当資料の訓点自体の判読、即ち、仮名符号の存在そのものの認知、認識の問題がある。

この客観物としての訓点の認知、認識は、現在の学問水準としては、研究者の判断に委ねられているのが実状であるが、その仮名やヲコト点などの符号類の物理的な分析は、今後、理化学的手法に委ねて客観性を増すべき事柄であって、研究者の解釈を基底とするヲコト点の体系の帰納の問題とは、レベルを異にする即物的な分析研究であると考えている。

- 10、平安初期の密教教典の加点点資料は、大毗盧遮那成仏経平安初期点（高野山大学蔵、特殊点甲類）、大毗盧遮那成仏経平安初期点（高野山大学、第二群点）、が知られるが、奥書が無く、稿者未調査である。

- 11、小林芳規「訓点語法史における副助詞「ら」（『国語と国文学』昭和三十年十一月号）。

- 12、小林芳規「平安朝の漢籍訓読の国語史的研究」（昭和四十二年三月、東京

大学出版会）序章第三節には、「則」字の訓読法が取り上げられて記述

されているが、「[則]（不読）」、「ト」[及]「ト」[不]「者」は何れも古い

訓法である。此に対して「則」<sup>スナハチ</sup>「及」<sup>オモキ</sup>「不」<sup>キ</sup>「者（人物）」は後出の新訓法

である。（一二三頁）と記しておられる。「則」字には、本稿に取り上

げた金剛頂瑜伽経仁和二年点に直読の確例があるのは本文中に示した。

「者」字については、第二節に触れている。「及」字は、訓点の厚い巻第

二には存在せず、巻第三には出現するが、仁和二年点の訓読法が確定で

きない。「不」字は、巻第二に15例出現し、助動詞連体形と思しき例は

なく、終止形1例である。巻第三には、「不」字は、11例出現するが、

仁和二年薄朱点の語形は確定できない。

- 13、小林芳規「漢文訓読史上の問題―再読字の成立について―」（『国語学』第十六輯、昭和三十八年十二月）。

14、大坪併治「平安初期の仏典における再読字の成立について」（『訓点語と訓点資料』第一二〇輯、平成二十年三月）。

15、注13文献。

16、注13文献。

- 17、中田祝夫・注5文献。

注2文献、第三部第二章。

例えば、立本寺本妙法蓮華経における明詮の訓点の識別は、奥書と移点

に使用された色彩によって区別できるものであるが、かかる資料の複数

の訓点が更に一筆で移点される如き事態を想定すれば、平安後期におい

て平安初期の言語事象が識別されずに埋没した資料となる。また、平安

後期において、平安初期の明詮の訓点が言語行為において生きていたこ

とを重視すべきである。

〔付記〕本稿に取り上げた金剛頂瑜伽経仁和二年点本の調査閲覧については、

石山寺御当局ならびに石山寺文化財総合調査団各位のご高配、ご温情に

与った。記して深謝申し上げます。

# 平安初期における密教經典の訓読語

松本光隆

## ―石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本について―

はじめに

訓点資料が伝えられた古い例は、奈良時代から存する。しかし、漢文訓読語の通時的研究としては、片仮名の加點資料が多く遺されている平安初期の訓点資料より始まる研究が、その成果の密度が高い。平安初期より年代を降りつつ資料を配して、時代時代の言語事象の記述を行い、訓読語の変化が語られるが、時代時代の共時態を取り上げれば、その共時態は、文体差とか、位相差という概念で説明されてきた日本語の相または層を内包する。通時的記述の結果に詳細な像を結ぶべき方向で研究を進めようと目論む場合、前の時代の言語事象が、前の時代の共時態のどの部分を占めるもので、後の時代の共時態のどの部分に対応して変化するかと言った観点は、訓読語の変化の実態を、立体的に描いて行くために基本的に重要且つ必須な視角の一つであろう。

本稿は、後節に詳述するが、石山寺校倉第十二函第三号として所

蔵されている金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經（以下、金剛頂瑜伽經）巻第二・三の二巻を対象に、言語事象の記述を中心として、密教の經に属する典籍の訓読語の問題を考えてみようとするものである。記述の狙いは、次の二点にある。第一点は、平安初期天台宗関係と目される密教經典の、従来から注目されてきた再読字や不読字の訓法を初めとする事象の、平安初期密教資料に現れる言語事象の実態記述である。第二点目は、同じ資料に加點されている天台宗山門派の平安後期の加點になる宝幢院点の訓読法の記述を通しての、仁和二年の訓読と、平安後期の訓読との通時的な問題、訓読語の改変（変化）と保守（伝承）の問題に触れようとするものである。

### 一、石山寺藏金剛頂瑜伽經巻第二・三の史料的价值（二）

#### ―平安初期の密教經相經典の加點資料―

本稿に取り上げる石山寺藏金剛頂瑜伽經は、卷子本二巻で、巻第二と巻第三とを伝えるが、巻第二には、平安初期仁和二年（八八六）の白書の奥書、

○仁和二年九月二日聞已於元慶寺圓大師御本／□□□命  
 が存する。本文には、この奥書きに対する白点(第一群点)が加  
 点されており、経関係の密教經典の平安初期の加点資料である事が知  
 られる。本巻第二には、この白書の奥書とは別に、別筆の墨書で、

○治承四季(一一八〇) 四月二日於石山寺東院房文泉房傳／受  
 了

の朗籠の奥書があつて、本文にはこれに対応する墨点の仮名の加  
 点がある。また、当該巻第二には、平安後期加点と推定される朱の宝  
 幢院点の加点も存している。

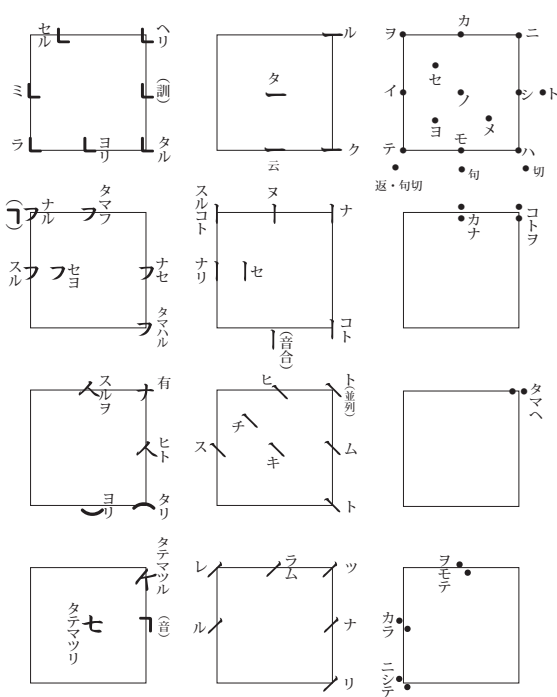
巻第三には、白点の加点はなく、薄朱による第一群点の加点が存  
 して、平安初期のものであると推定される。この他に、巻第二と同  
 じく平安後期加点と思しき朱の宝幢院点の加点が存する。また、多  
 くはないが巻第二と同様に、治承四年の朗籠の加点と思しき墨の仮  
 名点も存して、

○治承四季四月三日於石山寺東院房以／經藏之本文泉房傳受了  
 依未灌頂々々／事者空引之了

の奥書と対応したものであると判断される。

具体的な言語事象を取り上げて後節に説くが、当該資料には、仁  
 和二年点と認めた訓点中に、平安初期の語法が認められるので、巻  
 第二の白書の奥書は、転写ではなく、仁和二年のものであると判断  
 した。また、宝幢院点は、天台宗山門派のヲコト点法で、平安後期  
 には、同派での使用例があつて、十一・二世紀に、同派で盛んに使  
 用されたヲコト点法である。

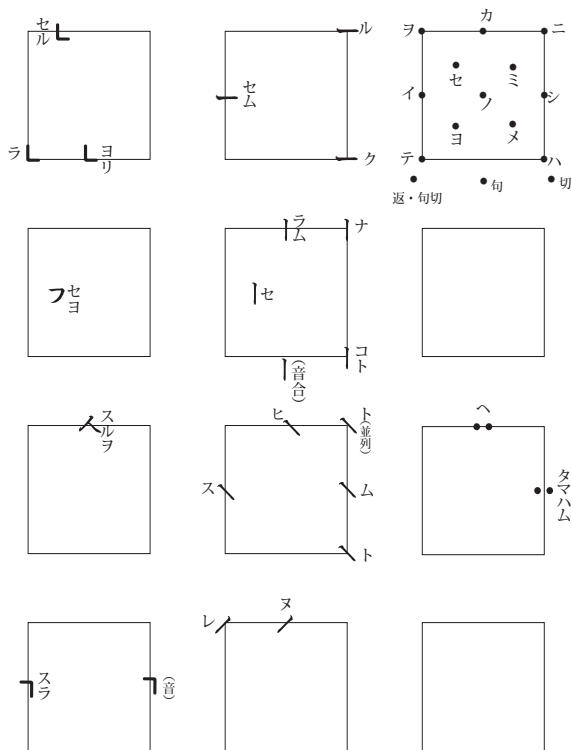
右の訓点の内、巻第二の仁和二年の白点は、ヲコト点主体で加  
 点されているが、その加点された第一群点は、左掲の如く帰納でき  
 るものである。



この帰納表の第一壺の星点の体系は、西墓点に通ずる。四辺・中央  
 および、右辺中央外側に「と」の点が帰納され、西墓点に合致する。  
 左内側は、「せ」と「よ」を帰納した。点図集に登載の西墓点は、  
 左内側の上が、「せ」の音節では無いが、点図集に登載の西墓点には壺の  
 内側上方に「せ」がある。右内側は、下方に「め」を帰納した。こ  
 れが、点図集登載の西墓点とは異なる。天台宗系の第一群点のヲコ  
 ト点と見て、矛盾は無い。



一方、巻第三に加点されている平安初期と思しき薄朱の第一群点は、



と帰納されるもので、巻第三の薄朱のヲコト点の体系が、巻第二の白点のものに比べて単純ではあるが、ヲコト点の符号が担う音節に矛盾がなく、同種のものとして認めて良いように判断される。巻第二は白書訓点、巻第三は薄朱の訓点で加点の色彩が不同であるが、共に仁和二年とみることが出来る様に判断される。

本資料の出自伝来については、治承四年には、石山寺にあった事は確実で、朗籠の伝授に供されている。巻第二の仁和二年の奥書中の「元慶寺」については、既に先学の指摘があるが、「元慶寺」は、

現京都市山科区に存する天台宗の寺院で、僧正遍昭の開基になる花山法皇(九六八〜一〇〇八)ゆかりの寺である。本資料自体が、石山寺に落ち着くまでに、如何なる経路を辿ったのかは明瞭さを欠くが、仁和二年に行われた「元慶寺」での講説の席にあった人物の關係した資料で、天台宗に発するものと考えてよいであろう。これらの事は既に築島裕博士が明らかにされているが、宝幢院点の加点から、天台宗も山門派に伝わったと見てよいであろうと認められる。

本資料は、ヲコト点主体の資料で、仮名点の加点が決して多くはない。後にも述べるが、訓点資料の質としては、一般には、重要性が薄いと判ぜられる類の加点量、加点密度の資料である。ただ、本資料が注目されるのは、密教経典である金剛頂瑜伽經の平安初期の加点資料の実物であるということである。

従来より、あるいは、漢文訓読語研究が始まって以来、平安初期の訓点資料は、その希少性と訓点書記の草創期の資料として珍重され、共時的あるいは通時的資料として取り上げられてきている。ただ、通時的研究の資料としての平安初期の訓点資料は、現存の資料的制約に依って、概して、偏った言語世界の資料を使用してきたと認められる。先に、立体的な漢文訓読語史を描くためには、通時的な像を描く前提として、時代時代の共時的な位置づけの必要性を説いたが、漢文訓読語研究史上からは、平安初期の訓点資料研究は、研究に使用されてきた資料が時代の共時態の全体を覆ったの均等な分布ではない。即ち、言い換えれば、平安初期の訓点資料は、多くは南都古宗の系統を引く、顕教系の諸資料に偏ったものであったと

評価すべきである。

平安時代初期の新興勢力である密教系の宗派、天台宗・真言宗に  
関して、密教系の典籍の将来は、将来目録類に依って確認されるこ  
ころであるし、密教經典の訓読は、実証的に確認する事が出来る。  
例えば、真言宗においては、訓点資料そのものには無いが、空海撰  
とされる一字頂輪王儀軌音義は、密教の事相書・儀軌である一字頂  
輪王儀軌から字句を抜き出し、それに万葉仮名和訓などを添えた卷  
音義で、儀軌の訓読の実態を考えねば、存在理由・存在意義の無い  
資料であると判断される。入唐僧の将来の密教經典とは異なるが、  
神護寺藏の沙門勝道歴山瑩玄珠碑は、平安初期の仮名点資料で、空  
海の撰述書である。大毗盧遮那成仏経疏に関しては、築島裕博士に  
よる言及があつて、真福寺宝生院藏大毗盧遮那成仏経疏保元二年  
(一一五七) 点本の本奥書中に、承和十三年(八四六) 四月二十五  
日から二十八日に及ぶ講説の記事のある事を指摘されている。聴衆  
は空海の弟子達で、訓点資料そのものが残されたのか否かの実証的  
な確証は無いが、大毗盧遮那成仏経疏の本文の訓読が行われた蓋然  
性は高いと認めねばなるまい。

平安初期天台宗の顕教関係書については、実際の平安初期の加点  
資料が残されていて、著名な華嚴関係資料群がある。年代の明確な、  
著名な加点資料として、延暦年間の奥書の存する資料類で、奈良時  
代最末期・平安極初期の加点年代の明確な資料として衆知されたも  
のがある。また、平安初期貞観十九年(八七七) の天台宗僧儀遠の  
奥書が存する華嚴経元慶三年(八七九) 点も知られている。

日本宗教史の事柄として、最澄が中国より伝えたときれる天台宗  
は、密教において十分ではなかったと説かれるところであるが、顕  
教系の書の訓読語は、実例について論じる事が出来る。しかし、こ  
の訓読語の出自が問題であつて、今までに先学に依つて古くより触  
れられてきた如く、訓読語の成立の背景には、南都との関係を念頭  
に置かねばならないであろう。

天台宗の密教系の經典類については、本奥書に訓読の事実が伝え  
られた例がある。石山寺藏金剛界儀軌天永三年(一一一二) 点本の  
本奥書には、「良勇(八五四〜九二三)」「敬一(八六七〜九四九)」  
の名が見えて、その訓説を伝えているから、密教の事相書である儀  
軌の訓読がなされていたであろうし、実例としての加点資料は、平  
安初期も最末期であるが、石山寺藏金剛界儀軌寛平元年(八八九)  
点、<sup>4</sup> 京都大学蔵蘇悉地羯羅経略疏寛平八年(八九六) 点と共に、本  
稿に取り上げる金剛頂瑜伽経が知られている。

円仁や円珍の将来目録には、両者重複するものも少なくないが、  
密教系の經典が多数に上る。本邦における密教系の末書が撰述され  
ている事実があるので、密教系經典が読解されたことは明白である。  
以上の如く、平安初期の真言宗にせよ、天台宗にせよ、密教系の  
經典の訓読が行われたであろうと考えられるものの、実例としての  
密教經典の実際の加点資料は、多く伝えられてはいないのが現実で  
ある。

そうした中であつて、本稿で取り上げて言語事象の記述を試みよ  
うとする石山寺藏金剛頂瑜伽経仁和二年点本は、平安初期の白点、

薄朱点(第一群点)の加点資料の実物であると共に、平安後期加点と推定される宝幢院点の加点が存して、時代を隔てた天台宗の訓読語の比較が可能で、訓読語の歴史的経緯の解明が可能な貴重な資料として位置づける事が出来る。

## 二、石山寺藏金剛頂瑜伽経卷第二・三の史料的价值(二)

### ―ヲコト点中心の資料の資料性―

右に検討した如く、石山寺藏金剛頂瑜伽経仁和二年点本は、漢文訓読語史の叙述にとつては、貴重な資料である事が理解されると思われるが、訓点資料としての不十分さも明確に自覚しておく必要がある。

当該資料の加点の様態は、卷第二の第一群点の白点も、また宝幢院点の朱点も、ヲコト点主体の加点である。卷第三の薄朱点も、また、宝幢院点も同様に、ヲコト点主体の加点資料である。朗籠による墨の仮名点は、両巻を合わせても数条に過ぎない。平安時代初期の密教の経の加点資料として、非常に重要な資料であると位置づけられるものではあるが、片仮名の加点の用例が多くは拾えない。

ヲコト点の日本語史における価値は、例えば、訓点資料の資料性の評価と関わる部分において存する事が知られている。奥書の存しない場合も、ヲコト点の種類による共時的な言語集団の推定がなされ、また、通時的なヲコト点の発生と伝承が描かれて来ている事によって資料の年代判定にも資する部分がある<sup>5)</sup>。

しかし、かかる有益な面がある一方で、訓点資料の具体的な訓読

語・訓読語形を取り上げようとする時、資料的価値に心許なさも存する。訓点資料に使われる文字・符号の内、仮名も多くが、片仮名による加点―の場合、基本的には、一字(字母〔万葉仮名〕に遡つて)は一音節に対応した、一対一の対応関係を時代の共時態に互つて持っている。例えば、語彙論や音韻、語法等の考察には、訓読語の語形の決定に関わつて、重要な拠り所となる。一方、ヲコト点の場合は、その符号に対応した音節が、何であったのかが、共時的に不確定であることが否めない。中田祝夫博士は、ヲコト点を八群に分かたれたが、その八群のヲコト点において、星点の体系が異なる。同じ時代でも共時的な言語集団の違いによつて、壺の同一の位置に付された星点の担う音節が異なる。即ち、星点の壺における位置的な示差が、言語集団集団によつて、別体系を形作る。その体系は、研究の現状においては、先ず、研究者によつて帰納され、一資料におけるヲコト点の全体系が明らかになるのであるが、この帰納されたヲコト点のそれぞれの符号が担う音節が、当時の該当資料に加点した言語主体の言語認識をそのまま正確に表した物であるのか否かが、問題となる。即ち、加点者のヲコト点の認識を、現代の研究者の帰納が、明確に指し示した物であるという客観的保証が必要となるのである。

星点の体系は、八群とも比較的単純な構造で、用例も多いため、帰納されて充てられる音節の蓋然性は高いものと考えられるが、それでも、一星点に二音節以上に該当するヲコト点種もある。線点や鉤点、あるいは、画数も二画以上になる符号においては、該当する

音節（語形）の認定が容易ではない。この研究者の帰納を、当時の言語実態としてより客観的に支えるのは、古聖教に残された点図や、各種のヲコト点図を集成した点図集であろう。かかる問題は、古くより意識されていて、古点図集の研究、点図集の対校や校訂の作業が積み重ねられてきた。<sup>6</sup>

築島裕博士は、中田祝夫博士の八分類を更に進められて、未発見であったヲコト点種を発見され、また、特殊点という分類範疇をたてられて、甲類と乙類の低位分類をされた。<sup>7</sup>ここに、言語資料としてのヲコト点の問題となるのは、築島博士が、訓点資料の博捜を基に、多くの点図集に記載されていないヲコト点を使った資料を見出されたことで、特殊点はその典型であろうが、八群―実際には内、六群―のヲコト点も、点図集に記載されていない体系のヲコト点は、少なからず存するのであって、これらの資料が問題となる。即ち、これらのヲコト点資料のヲコト点は、現状としては、研究者の帰納によるしか無く、謂わば、現代研究者の主観性や解釈が入るのを完全には排除できない。学史的に、古くは、特に、平安初期の資料の訓読文について、複数の訓読文が公にされて、各者各様に異同が存し、所謂、異なつた訓読文が存在していたことを批判の対象にもされたが、この批判は、極めて後ろ向きな研究態度としか言いようがなく、以上の様な実情に鑑みれば、現代においての訓読文間の異同の存在は、当然と言えば当然の成り行きであつて、かかる学問的認識を持つて、訓読文と言う形で公にされた日本語資料と接すべきである。即ち、訓読文作成の立脚点において既に、点図集所載のヲコ

ト点類とは、その訓読文の基礎を支えるものが希薄なのであつて、その事を殊更に取り上げて、論難すべきことでもないことは、至極当然のこととして認識し、その見地から、日本語資料として使用すれば良いだけのことはあるまいか。更に、贅言を添えれば、利用する側は、確例として取り上げられるレベルのものと、些か、躊躇される例とを峻別して、利用すればよいだけのことである。<sup>9</sup>

同一資料内の言語情報として、その価値は、仮名点において高く、これに比較すれば、ヲコト点の、言語情報としての信頼性は低いと論断せねばならない。本稿に取り上げる石山寺藏金剛頂瑜伽経仁和二年点本は、点図集には記載のない第一群点によるヲコト点主体の資料である。ここに、本資料の言語資料としての信頼性についての資料的弱点が存するのであるが、第一節にも述べた如く、本資料にかわる平安初期の、しかも、加点年代の明確な密教経関係の資料は他になく、他に代えがたいところである。右の、ヲコト点という符号の言語資料としての信頼性の低さを、念頭に置けば、本稿自体が、必然的に所詮、極めて脆弱な基盤に立つた論であると認識・評価せねばならないことを、まずここに告白して置く。

### 三、石山寺藏金剛頂瑜伽経仁和二年点の訓読語

#### ―平安初期語法を中心に―

次には、従来の研究において、注目され取り上げられてきた訓読語の内、仁和二年点の助詞、読添語を中心に記述を行つておく。

第一節に記述した如く、仁和二年点には、星点・左中央に「い」



の音節が現れる。このヲコト点「い」は、

1、爾(の)時(に) 毗首羯磨大菩薩の身い「從」世尊の心より  
下(り)て(卷第二・仁和二年点)

2、願(はく)は大乗を現證(し)たまへたるい遍して大理趣を  
流へたるに。我等汝尊を請(し)たてまつる。(卷第二・仁和  
二年点)

3、金剛形住藏い「於」心(の)中(に)觀(す)當(し) (卷  
第三・仁和二年薄朱点)

4、不動佛い地(に)觸(せよ) (卷第三・仁和二年薄朱点)

などと現れる。この副助詞「い」は、古代の助詞とも称されるもので、平安中期以降には、特定の訓点資料を除いて、その使用は衰退すると説かれるものであるが、本仁和二年点にはその助詞「い」が出現する。第一節に帰納したヲコト点の星点の配列は、外周と中央は、西墓点と等しく、左辺中央の星点は、副助詞「い」として使用されている。

平安初期には、一般に、「者」字を、事物の用字と人物の用字とで、「モノ」と「ヒト」との読み分けると説かれる。当該仁和二年点には、

5、奇(き)哉精進の甲、我固(き)には堅固の者なり  
(卷第二・仁和二年点)

6、諸の縛脱たる者(ヒト)を有情の利の故に縛(音)せ令む。  
(卷第二・仁和二年点)

ヲコト点に従って掲げた例であるが、例6には、この右辺中央の「人」のヲコト点とは別に、右辺裾に「と」の加点があつて、「ヒト」の

第二音節に相当するものと認定される。先のヲコト点の帰納において壺右辺中央の「人」を、「ひと」と帰納したが、更にこの例に依つて、「者」字に「ヒト」訓を与えた蓋然性が高まろう。

以上の例は、従来、平安初期の訓点資料には現れる例であつて、平安時代も後半期になると用例が少なくなつたり、あるいは、「者」などは、「モノ」訓が普通となる事象であつて、卷第二の白点、卷第三の薄朱点が、平安初期の訓点である事を裏付ける。また、同資料中の平安後期宝幢院点の訓読は、「者」字に、「モノ」訓を与えている。

金剛頂瑜伽経仁和二年点においては、一方で、従来、平安中期訓点資料になつて出現する事象であると説かれてきた例が、既に仁和二年点に出現する例がある。

7、金剛眼と淨と等は无量壽の輪壇にせよ。(卷第二・仁和二年点)

孤例であるが、当該資料には多くない片仮名点で記された例で、副助詞「ラ」が出現する。従来説かれて来たのは、京都大学図書館蔵蘇悉地羯羅経延喜九年(九〇九)点が最古の例で、これより遡つた例となる。京都大学図書館蔵蘇悉地羯羅経には、延喜九年の西墓点の加点があつて、当該資料と同系統の資料であると位置づけられる。次節以降には、仁和二年点の助字と再読字の記述を行い、更に、平安後期宝幢院点の訓読法についても記述することとする。

#### 四、石山寺藏金剛頂瑜伽経仁和二年点本の訓読語

##### ― 助字の訓読法 ―

まず、当該資料中に現れる助字の訓読法について、記述を行ってみる。

最初に、「従」字の訓読法に焦点を当てる。当該資料において「従」字は、仁和二年点、平安後期点において、以下のように訓読される。

- 8、爾(の時)に毗首羯磨大菩薩の身〔従〕世尊の心〔下〕より下(り)て一切如来の前の月輪〔返〕に依(り)て(卷第二・仁和二年点)
- 9、爾(の時)に毗首羯磨大菩薩の身世尊の心〔返〕従(り)下(り)て一切如来の前の月輪〔返〕に依(り)(卷第二・平安後期点(右と同一箇所))

用例8の平安初期仁和二年点では、「従」字は不読とされ、格助詞「ヨリ」は、漢文の構文において、下接した語句に読添えられる。一方、時代が降つての平安後期点では、例9のように「従」字を直読し、「ヨリ」訓を与えて訓読している。特に、巻第二において「従」字は、屢々出現するが、仁和二年点では、下接語句に「ヨリ」訓が添えられる場合、不読として例外がない。一方、平安後期点においては、用例9の如く、「従」字の「ヨリ」直読例が頻出する。

仁和二年点において「従」字が直読されて、「シタガフ」訓が与えられた以下の様な訓読法も確認される。

- 10、一切如来心〔返〕に従(ひ)て纔(に)出(て)已(る)に(卷第二・仁和二年点)

11、彼(の)一切(の)花供養(の)嚴飾〔返〕に従(ひ)て一切世界(の)微塵等の如来の身〔返〕を出して(卷第二・平安後期点)とした例が認められる。用例10の仁和二年点は、「従」字を直読して、

「シタガフ」訓を与えている。平安後期点の用例11でも、「従」字を直読して、「シタガフ」訓が充当されたものと思しい。

「従」字については、以下の例も認められる。

- 12、「〔従〕彼の金剛甲冑(の)形より一切世界の微塵等(の)如来身を出(た)す(卷第二・仁和二年点)
- 13、彼(の)金剛甲冑(の)形〔返〕従(り)「〔従〕彼(の)金剛甲冑(の)形を」一切世界の微塵等の如来の身を出(た)したまふ。(卷第二・平安後期点(右と同一箇所))

用例12の仁和二年点は、先掲例8と同様、不読の訓法を採る。これに対して、用例13の平安後期の朱宝幢院点では、該当箇所にも異読が併存する例と認められて、漢文本文「〔従〕彼金剛甲冑形出一切世界微塵等如来身」の「形」字には、ヲコト点星点の「を」と返点の二種の加点が存するが、この二点を矛盾無く訓読するには、異訓の併記例であると解釈するのが最も合理的である。即ち、平安後期点においては、「従」字の助詞「ヨリ」の直読例と、「従」字の不読例とが併存していると認められる。後者の場合は、「従」字を不読字とした訓読法で、訓読の状況は全同ではないが、平安初期の仁和二年点の如く、「従」字を不読としている可能性があるものと判断する。

漢文の構文で下接語句に「ヨリ」が読添えられる「従」字の訓読について整理すれば、平安初期の仁和二年白点では、「従」字は、不読として例外がない。これに対して平安後期点では、「従」字を「ヨリ」と直読した例が頻出するので、平安初期不読→平安後期直読とした、従来から説かれた方向での変化が認められる事象として記述

することが出来る。

しかし、この纏めで万全の変化の状況を記述したものであるかと言えば、不十分であると認められよう。即ち、平安後期訓読の実態は、右の如く助詞「ヨリ」を直読した例が確かに圧倒的ではあるが、動詞「シタガフ」訓を充当したもの、また、孤例ではあるが平安初期点に通ずる「從」字不読の例が存した可能性がある。大きな視点からの傾向としての歴史の鳥瞰的把握―日本語の歴史の方向性のイメージ―と言う大義からすれば、右の平安後期点における不読例は、孤例で用例数寡少なるが故に、例外として切り捨てられかねないが、切り捨ててしまつて良いほどに小さな問題なのであろうか。

鳥瞰的とも言うべき言語変化の歴史の大括りな概括では、「平安初期の訓読語(または、訓読法)は、当時の日本語として自然である語法・表現等を採用する。例えば、平安初期の訓読法は、文末においての表現が多様・多彩で、訓読語表現としての表現性が、平安中期以降の訓読語に比べて高い」とか、「平安初期の訓読は、特定の一漢字に対しての対応和訓は、複数のものが存して、それを文脈によつて使い分け、日本語として自然な表現を採るべく運用されるが、平安中期以降の訓読語においては、特定の一漢字に対して和訓が限定され固定して、平安初期の表現性に比べれば、表現の幅が狭くなり、画一化していく」などと纏められてきたように思われる。

確かに、このような傾向があることは否定はしないし、それで説明の出来る言語事象も多いのは事実であるが、訓読語の全てをかかせる歴史的变化のイメージで包括的に捉え切れるかと言えば、本稿に

掲げたような例外と言うべき事象が、存在する可能性を認めねばならない。孤例であるので、確例の採取を第一の課題として後に委ねねばならないが、今後の研究の進展の方向としては、一方的な流れのみではなく、右の概括的な把握に相矛盾する、例外として切り捨てられてきた言語事象の存在を掬い上げ、これを訓読語の歴史の中で正統に位置づけ、立体的な訓読の場の言語表現の歴史を再度組立て直す必要に迫られていると考えるべきである。かかる視点からの研究の果たすところは、言語生活史の叙述の組立て直しに他ならない。

次に、「而」字を取り上げてみる。仁和二年点においては、「而」字は、不読とされたと思しい例が夥しい。

14、世尊 不空成就如來の左邊の月輪(返)に依(り)て「而」住して此の温陀南を説かく(卷第二・仁和二年点)

の如く、加點がないのが普通であるが、

15、世尊 金剛摩尼峯樓閣の金剛門の中の月輪(返)に依(り)て而(し)て住して(卷第二・仁和二年点)

の如く、接続助詞「て」を「依」字に読み添えているから、「而」字は、接続詞「シカウシテ」に読んだと思しき例が例外的に存する。また、

16、四の線を(し)而(し)交絡し 繪綵と鬘と花嚴せよ。(卷第二・仁和二年点)

とした例があつて、「而」字は「て」と直読されたと思しいが、用例は多くない。つまり、仁和二年点においては、「而」字は不読が主で、纔に接続詞・接続助詞直読訓が認められる。一方、平安後期

点では、

17、世尊 金剛摩尼峯樓閣の隅の左の邊の月輪(返)に依(り)て「而」住(し)ぬ。(巻第二・平安後期点)

とした、仁和二年点と同様の不読例が認められる。巻第三(仁和二年と推定した薄朱の訓点の密度が低く、仁和二年の用例としての確例が、多くは拾えないが、平安後期の宝幢院点は、ヲコト点が中心であるが全巻に亙つて加點されて平安後期の用例として確認することが出来る)にも、不読例が散見される。仁和二年点にも認められる例としては、

18、世尊 不動如來の曼荼羅ノ左の邊の月輪(返)に依(り)而住(す)。(巻第二・平安後期点)

19、世尊 金剛摩尼峯樓閣の寶眉間の月輪(返)に依(り)て而(り)して「而」住(して)。(巻第二・平安後期点)

など、接続助詞「て」や接続詞「シカウシテ」の用例も確認される。仁和二年点においては確認されない接続詞「シカモ」の例も存して、

20、世尊 不空成就如來の左邊の月輪(返)に依(り)て而(り)住(し)ぬ。此(の)温陀南(を)説(かく)。(巻第二・平安後期点(用例7と同一箇所))

用例19の異読例などにも認められる。

右に掲げた「而」字の用例は、用例16を除いて皆、同様の構文であるが、「而」字の訓読には変化が認められ、平安後期点において表現の幅が増す。仁和二年点と平安後期宝幢院点の訓読語の違いは、語種の問題としては、平安後期点には、仁和二年点に現れない「シ

カモ」訓が確認される。むしろ、量的な傾向として、仁和二年点には不読例が圧倒的であるのに対して、平安後期点も不読例が存するものの、「而」字に加點された例が大半を占めるのであって、この点に、通時的な差を認め得る。ただ、ここでも注意すべきは、平安初期の訓読法は全て、平安後期の訓読法のバリエーションに含まれていると言うことであろう。即ち、平安後期においての方が、用法は豊富である。かかる変化は、時代の流れとされてきた訓読語の画一化、単純化では、説明しきれない事柄であつて、例えば、語や文の接続関係を明示する機能を持った語が顕現している事と捉えれば、文章表現は、論理的な方向性を強めていると認めることが可能であろう。

なお、「而」字の訓読のバリエーションは、金剛頂瑜伽經の漢文脈の性格に拠っていると判断されるが、逆接の接続詞は出現していない。この点も、後節に触れるが、訓読語の使用を予め制限する原漢文のありようを考慮して記述する必要がある。

以下、助字に関する記述を更に重ねる。続いて、「則」字を取り上げてみる。当該資料において、「則」字は、以下のように訓読される。ヲコト点によつてではあるが、以下の確例が拾われる。文中に使用された例で、

21、結(むす)に由(り)て集(り)たてまつりて則(ち)喜(び)たまふ。(巻第二・仁和二年点)

とあって、ヲコト点「ち」の加點が存する。これ以外は、  
22、一切虚空界(返)に量遍(して)則(ち)一切如來の羯磨界(の)



故(に) (巻第二・仁和二年点)

の如くであって、「則」字には、一切の加点がない。平安後期宝幢院点も、一切加点が存しない。文中例、

23、一切虚空界(返)に量り遍(く)して則(ち)一切如來の羯磨界の故に(巻第二・平安後期点(右と同一箇所))

文頭でも、

24、則(ち)一切如來金剛(の)名(を)以て金剛毗首(返)と號(け) (巻第二・仁和二年点)

25、則(ち)一切如來金剛の名(返)を以(て)金剛毗首(返)と號(け)たまふ。(巻第二・平安後期点(右と同一箇所))

と訓読される。この「則」字は、仁和二年点では、例21の確例一例が存するが、巻第二・巻第三を通じて、平安後期点には、一切の付訓・加点がなされない字と扱われて例外がない。この「則」字の訓読法を、結論的には「スナハチ」の直読例と措定した。但し、当該資料は、既に説いたようにヲコト点主体の資料である。平安後期の宝幢院点も、これに対応する片仮名訓点は、限られたものである。「則」字については、平安後期の宝幢院点も、ヲコト点の加点すらない状況である。かかる状況を如何に解釈するかには、数通りの解釈が可能で、些かの主観的なものが入らざるを得ないことを予め断っておくが、資料全体を通じて仁和二年点に孤例である、ヲコト点「ち」の加点があることを以て、「則」字直読として扱った。以下は贅言に属しようが、積極的に不読であることを示す記号・符号類は一切存しない。この直読の扱いに、孤例のみが直読であってわざわざその

事を示すための唯一の加点であるとか等その他、反論は種々予測される所であるが、ここで強調しておきたいのは、右にも述べた如く、仁和二年点においても、また、平安後期点においても、加点上の扱いは概して同等であると言う事実である。一般に、仏書における「則」字の直読例は、平安後期の他資料には、普通に見いだすことができずる事象である<sup>(1)(2)</sup>。消極的にはあるが、平安初期と平安後期の訓読法が同一であった可能性が高いと判断する。因みに、「即」字は、両点とも加点の確例がない。

さて、本節では助字の訓読法を中心として取り上げているが、例えば、漢文における文末の助字は、漢文の文章表現においてモダリティを支配する場合が多い。その表現の有り様を、日本語表現として如何に訓読するかと言う課題に対応して、訓読語の変化、あるいは、幅が規定されよう。原漢文の文末表現の多様さに対応して、訓読語の表現も多様さを見せるものと考えられるが、金剛頂瑜伽經の場合の原漢文には、出現を見ない文末助字が存して、他と比較できない場合が存する。例えば、大正新脩大藏經テキストデータベース(大藏經テキストデータベース研究会(SAT)、<http://21dzk.i.u-tokyo.ac.jp/SAT/>、平成二十一年十月二十六日現在検索)の「金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經(0865、不空譯)」について、「也」字の検索を行うと20例のヒットが有るが、Footnoteに5例、残りの15例は、いずれも陀羅尼中の用字であって、そもそも漢文本文には出現しない。「焉」「矣」は、漢字自体が存しない。「乎」は、Footnoteに1例のみ、「歟」も出現がない。「之」は、11例の

ヒットがあるが、連体の助字として7例、反切の用字として1例、Footnoteに1例、文末助字「之」としては、2例のヒットがある。石山寺藏金剛頂瑜伽經卷第三に存するもので、仁和二年薄朱点では訓読が確認できないが、平安後期宝幢院点では、

26、係(返)を加(へ)て用(ゐ)、之を呼(ふ)應し。(卷第三・平安後期点)

27、彼(の)所樂(返)に隨(ひ)て之を説(く)應(し)。(卷第三・平安後期点)

と、共に代名詞訓を与える。「耳」も文末には現れないし、「而已」の連文なども出現しない。

一般に、顕教系の資料を中心として形作られてきた平安初期訓点資料の文末表現のイメージは、後世画一化する文末に対して、読添語も豊富で、多彩であると説かれてきているが、本稿で対象とする金剛頂瑜伽經では、そもそも、右に例示した如く、原漢文の文末表現が単純で、これと対応するかの如く、平安初期訓点資料に特徴的と言われる文末表現の豊かさが追認できない。その意味では、仁和二年点においても、また、時代を隔てた平安後期点においても、訓読の質にさほどの変化が認められないことなるう。

即ち、原漢文の訓読語表現に対する支配という視点での検討が、今後必要とされよう。

## 五、金剛頂瑜伽經仁和二年点本の再読字

石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本は、卷第二と第三の二巻が伝

えられているが、金剛頂瑜伽經の原漢文自体が、事相に関する記事が中心で、方書的で、曲折の多い文章ではないことの一端は前節に触れた。以下、代表的な、所謂、再読字について検討を行ってみる。前節にも使った大正新脩大藏經テキストデータベースの「金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經(0865、不空譯)」について、所謂、代表的な再読字を検索してみると、「宜」字は、検索数は0である。「將」は、検索数1例であるが、Footnoteに現れる。「須」は、検索数2であるが、「須彌盧頂金剛摩尼寶峯樓閣」と「刹那攞嚩須臾頃」と現れて、訓読語の副詞とか助動詞が当たる用字ではない。「且」は、検索数1で、「次當且先以四禮。」と現れる。「未」は二例。「未曾有」と「未知」として現れる。「猶」は、検索数5であるが、Footnoteに二例、「猶如胡麻」(二例)と「猶如遍修功用」とあって、本文中三例が連文「猶如」として出現する。

「當」字は、28例がヒットする。この内の一例は、Footnoteに現れる。訓読語では、実動詞として二格を取ると思われる例、「即前金剛合掌當心以頂著地」や「先當金剛縛摧拍自心誦心眞言曰」の如くの動詞としての用字が四例がある。「應」は、検索数67が現れる。二例がFootnoteに出現する。

右の検索結果は、不空訳の「金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經」の用字を視点としてみると、漢文の文体の有り様に関する問題が存するように認められる。原漢文を基に訓読される訳であるから、訓読語の基底的な前提としての制約として、まず、漢文がある。この漢文の文体(用字)が問題で、「金剛頂一切如來眞實攝大乘現

證大教王經」には、「當」「應」両字は、右に掲げた用例数が使用されているが、一方、「宜」「將」「須」「且」「未」「猶」(当該字の再読訓法の成立は時代が降ると説かれている)「字」に関しては、殆ど出現しない。これら出現の多寡は、再読字の成立事情として考えられる状況に、少なからず影響を与えるであろう。再読字の成立は、平安中期(十世紀)からであると説かれてきた。<sup>(13)</sup> そもそも再読字の成立は、平安初期における「當」「應」や、「將」「未」などが、副詞訓かまたは、サ変動詞、助動詞訓を与えられて、文中で単読されていたものが、副詞と文末との呼応関係が定型化したため、一字に對しての二度読みが定着したとした過程を考えることが出来る。定型化するためには、多出して、しかも、時間と共に文末の表現が狭められ、形式が単純に成つていく過程が必要であろう。再読字の成立は、本質的には一字に對しての加点上の表記の問題——読み下し文を読み上げられる場合は、再読か否かは、講読など耳で聞いては確定できない——と、文章としての漢文訓読表現の文末の単純化の問題であろうと考えられるが、再読字に相当する用字の用例が乏しい原漢文に對する訓読と言う言語環境下では、再読は生じ難いことになる。即ち、定型化するだけの使用用例の量が必要となる事柄で、「當」や「應」字を措いて、他の字に關しては、不空訳の「金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經」の如き漢文体を有する資料を母体としては、再読の訓読法は生じにくいこととなろう。論述が前後するが、増して、次節に記述した如く、当該資料である金剛頂瑜伽經仁和二年点においては、用例の存する「應」字は、助動詞「ベシ」

の単読と見て例外がないし、「當」字は、単字の場合は助動詞「ベシ」訓で例外がなく、(平安後期点の状況からは「應當」「當應」の共起の例においては副詞訓「マサニ」を採つて例外がなく) 整然と読まれて混乱がない。

以下、同様の分析を、二二三の密教関係書を取り上げて行つてみる。同じく不空の訳にかかる事相書である儀軌を取り上げてみる。「金剛頂蓮華部心念誦儀軌」(873、不空譯)では、「當」字は21例存する。「應」は52例がヒットする。一方で、「宜」は0例、「將」も0例、「且」も0例、「猶」も用例がヒットしない。「須」では、1例のヒットがあるが、「次想須彌盧」とある用例で、副詞や助動詞訓に当たるものではない。「未」は3例が出現して、副詞訓、あるいは、助動詞訓の該当用字である。

同じく不空の訳である「金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌」(1199、不空譯)では、「當」が5例、「應」が8例のヒットがあるが、「宜」は0例、「且」も0例、「猶」には5例のヒットがあるが、内1例はFootnoteで、他4例は「水火俱散開猶如蓮華葉」の如く、「猶如」として現れる。「將」は1例がヒットするが、「亦皆能將來」とあつて、訓読語では複合動詞訓が充当されるとも理解される。「須」は3例がヒットする。1例は「便即須割取執之」とあつて動詞に前置されるが、その他の2例は、「若所須宮觀皆悉能成辦」などとあつて、動詞訓が充当されると思ひき用字である。「未」は、2例のヒットがあつて、動詞に前置される構文で現れる。出現する用例の全体が数量的に多くはないが、それでも「當」「應」字には、

用例があるものの、「須」「未」に、動詞に前置した副詞訓または助動詞訓充当例が纔に確認される以外は、漢文本文に現れない。

法全の手になる「大毗盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌供養方便會」(0852、法全撰)では、「當」字は、動詞も含むが54例ヒットする。「應」も32例を数える。また、「未」字は、12例が出現する。「猶」は、26例ヒットするが、内、「猶如」「猶若」とFootnoteを除けば、13例存在する。一方、「宜」は3例のヒットがあるが、1例は、Footnoteで、のこり2例は陀羅尼中の反切上字として現れる。「將」は2例がヒットするが、いずれも「金剛將菩薩」として使用される。「須」は2例有つて共に「目連須菩提迦葉舍利弗」とした固有名詞中で使われる。同じく儀軌であっても、不空訳の儀軌類と出現状況に差があるが、「宜」以下の字については、再読構文での使用がない。

「大毗盧遮那成佛神變加持經」(0848、善無畏 一行譯)は、善無為、一行訳の書であるが、この書では、「當」が326例、「應」は239例ヒットする。「未」字は、32例のヒットが確認される。「猶」は55例のヒットがあるが、「猶如」の出現も少なくない。「宜」は全5例がヒットするが、1例はFootnoteに現れ、1例は「如是等好相宜應諦分別」のように「宜應」の文字列で出現する。1例は、Footnoteに対応する箇所で「非是所宜」とあるが、連用修飾を果たしている用字ではない。更に1例は、陀羅尼中であつて、割書で反切を表記した「宜以反」と現れる。残りの3例中2例は「善觀時宜所當作」とあり、1例は「依於地分所宜處」とあつて、同様である。即ち、

「宜」の再読に該当する用字はない。「將」は0例、「須」は3例のヒット中2例は「須彌」、1例は「次説漫荼羅所須次第」とあつて、動詞の用字でるとみとめられ、再読される用字での使用がない。「且」は0例である。

同じく密教經典である輪波迦羅訳の「蘇悉地羯囉經」(0893、輪波迦羅譯)を例に取れば、以下の如くである。「當」字は579例がヒットする。「應」字は、258例のヒットがある。「將」字は、33例が存している。「須」は362例、「未」字は51例、「猶」は31例がヒットして、連用修飾に立つ用例が拾える。一方、副詞訓が与えられる条件にない、あるいは、連用修飾に立つ構文が極めて少ないのは、次の二字である。「宜」字は14例ヒットするが、Footnoteに2例、「宜當」の連文が3例、反切注の用字が3例であり、残りの用例は、連用修飾に立つ例ではなく、述語に相当していると思しい。「且」は4例のヒット中、3例が「且如諸天之中亦有貧者」の用例で、1例のみが「初且誦其眞言」とあつて、連用修飾に立つ。

一行の筆記になる「大毗盧遮那成佛經疏」(1796、一行記)の場合には、「當」は439例で、「應」は709例存する。この二字に比べれば、用例数は少ないものの、「宜」は43例のヒットがあり、「將」は96例、「須」は179例、「且」は53例、「未」は379例、「猶」は459例のヒットがある。

右には、金剛頂瑜伽經を中心に、数点の密教經典における、所謂、再読字の出現、用字を確認してきたが、諸書においての状況は様々であると結論できよう。傾向的には、事相書である方書の儀軌類は、「當」「應」字の出現が確認されるものの、取り上げた「宜」「將」「須」



「且」「未」「猶」の出現は稀である。やはり方書的側面を持つ金剛頂瑜伽經、大日經も、通ずる傾向が見て取れるが、方書的文章を含む蘇悉地羯羅經は、これとは異なつた様相を示している。

大日經疏においては、右に取り上げた各字の用例の多寡はあるものの、連用修飾の用字が纏まつて確認される。

以上の記述を通じて、密教經典という範疇で、再読字の問題を対象に検討を加えようとする場合、諸種の問題が浮かび上がったものと判断する。再読字の出現の状況は、まず、記載された内容によって左右される点が存することである。方書（供養の作法書）である儀軌には、処方のための義務や命令の必然性を指示・表現する用字と認められる。「當」「應」などが多用されるのには、必然性が有るように認められる。

また、右に加えて、原漢文の、漢訳者の文体的な個性の問題も絡んでこよう。従来は、こうした原漢文の用字の問題を描いて論じてきたように思われる。一資料を一つの言語事象の完結体と見れば、資料間における差異を念頭に置いて言語事象の処理を考えねばならない。即ち、儀軌類を取り上げて再読字の問題を論じようとする場合、「當」や「應」についての用例は、求めやすい故に、論述の対象として取り上げることが出来る。一方で、右に取り上げた「宜」以下の諸字については、そもそも用例そのものが求めがたい、あるいは、存在しないのであるから、再読の訓読法が存したか否かは、不明として保留せねばならぬ理屈となる。

再読字については、反論もあるが、平安中期中頭以降の資料に色

濃く出現すると認められる<sup>15)</sup>。従来の論述が、平安初期を一共時態として扱い、平安中期も一共時態と扱って通時的に論じられてきたが、平安初期（また平安中期）の共時的状況、即ち、位相として複数の言語集団が併存したと見る所から出発すれば、時代の共時態の如何なる部分において、あるいは、極論すれば誰から発生したのかと言う課題が設定できる。再読訓法の成立母体を、いかなる共時的言語集団であると考えるか糸口は、あるいは、日常的に事例として多くの、所謂、再読字構文に接していたところに求めることが出来るとすれば、原漢文の分析は、推論を立てる一つの方法となりうるかも知れないが、今後の課題として措くこととする。

言語変化の恒であるが、変化の原拠が、言語表現の混乱に有る場合がある。用例の多出と共に、漢文脈上の同一の「當」「應」字が、時には助動詞訓を採り、時には副詞訓を採って混乱が存する故に再読が定着したと言つた経緯が考えられよう。平安初期において同一漢文に複数の訓読が併記されるとか、幼少時の訓読語の学習、習得時の混乱であるとかを想定すれば事態の成立が理解され易いであろう。稿者の耳底には、かかる想定は、空想でしかないとの批判が聞こえてくるが、要するに即ち、定型化するだけの用例の量が必要となる事柄で、漢字一字に、二度の読みが定着するには、それだけの言語変化を起こすべき、量的な力が必要であろう。金剛頂瑜伽經仁和二年点の如き、用例自体が少量であるとか、また、整然とした訓読法が実行されているような共時的な言語集団、言語資料においては再読字の成立への力学は存在しないと断じることが出来よう。更

に、付け加えて誤解の無いようにと考えるが、以上の論述は、平安初期の天台宗、という共時態においての再読字の成立を否定する訳では無いことを断っておく。即ち、平安初期天台宗において、諸種の言語集団が措定できるのであつて、当然、華嚴経や法華経を中心とする顕経系の集団も、密教系の集団も、浄土系や天台禅系の集団も、あるいは修験道関係も存した訳であろうから、この点に意を注いでおく必要がある。

#### 六、石山寺藏金剛頂瑜伽経仁和二年点本の再読字の訓読

以下には、前節の検討から、石山寺藏金剛頂瑜伽経仁和二年点本の、所謂、再読字について、仁和二年点の状況を、「當」「應」字を取り上げて記述・検討する。

石山寺藏金剛頂瑜伽経仁和二年点の巻第二の白点、巻第三薄朱点、は、本文の私読を基に、第一節において帰納した通りであるが、仮名点の加点は、ごく稀である。ヲコト点を中心としての記述となるのは助字の場合と同様である。再読字「當」は、仁和二年点の訓読において、以下の通りに現れる。

28、次に我れ遍く説く當し (巻第二・仁和二年点)

29、次(に)且(く)先(つ)四礼を以て一切如來を礼(す)當し (巻第三・仁和二年薄朱点)

右のごとく「當」字が単独である場合、助動詞「ベシ」に単読されて例外がない。平安後期宝幢院点においても同様で、

30、印(返)に住して則(ち)起して「於」諸方を顧(視)す當し。(巻

#### 第二・平安後期点)

31、觀(し)已(り)て「於」地(返)に住して則(ち)伏藏を見(る)當し。(巻第三・平安後期点)

とあつて、助動詞「ベシ」の単読である。平安後期点においての訓読法は、平安初期仁和二年点と等しい。仁和二年点では確認されないが、平安後期点で、「當」字に、副詞訓「マサニ」が出現するのは、「應」字と共に起する場合で、巻第三には、

32、當に自身と觀(す)應し。〈應當觀自身〉(巻第三・平安後期点)

33、汝常に當に而(し)て受持す應し。〈汝應等而受持〉

(巻第三・平安後期点)

とあつて、「當」字は、副詞訓単読で読まれている。

「應」字は、再読訓法の成立が、「當」などよりは、遅れると説かれる再読字であるが、この「應」字も、平安初期仁和二年点においても、また、平安後期宝幢院点においても単読で、助動詞「ベシ」訓が与えられて例外がない。仁和二年点では、

34、教(返)の如く「於」曼茶羅の中に安坐す應し。(巻第二・仁和二年点)

35、此(の)金剛界大曼茶羅(に)入(る)應し

(巻第三・仁和二年薄朱点)

の如く出現し、平安後期宝幢院点においても、右の例と同一箇所、単読で「ベシ」訓が与えられ、また、

36、思惟して加持す應し。(巻第二・平安後期点)

37、善く思惟を作して大印をして成就(せ)令む應し。

## (巻第三・平安後期点)

とあって、仁和二年点と同一であることに矛盾がない。

ここに、平安初期の訓読法と平安後期の訓読法が同一であることが注目される。かかる状況が、平安後期の天台宗山門派において厳然と存在していたことを明確に意識せねばならない。即ち、平安後期天台宗山門派の訓読語には、事象として、一般に認められる平安後期の訓読法を採らず、平安初期と同様の訓読法を保守した言語活動が厳然と存在していたことを、明確に認識しておく必要がある。

## 七、本稿の検討に見える漢文訓読語史の問題点

本稿においては、石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本に存する、平安初期仁和二年加點と認められる天台宗關係の第一群点と平安後期(平安後期)に加點された宝幢院点の訓読法の比較を行って来た。その結果、以下の事が認められた。

一、副助詞「イ」や「者」字の訓に関して、金剛頂瑜伽經仁和二年点には、平安初期語法が確認され、これらの事象については、平安後期点において、平安後半期的な訓読事象に変化した例が認められる。

一、平安中期以降、漢文訓読語に出現するとされる副助詞「ら」が、平安初期の他資料に先行して仁和二年点に出現している。

一、助字の訓法を検討すると、平安初期仁和二年点において不読傾向にあった「從」字の訓読は、平安後期点において直読されることが殆どであるように変化するが、不読用法も残していた

可能性がある。

一、「則」字の訓読は、仁和二年点と平安後期点において同一の扱いをされて直読されている。

一、「而」字の訓読は、仁和二年点において不読の用例が目立つが、平安後期点においては直読例が多くなり、与えられた訓も平安後期点において語種が多い。

一、所謂、再読字の訓読法は、「當」「應」字について、平安初期仁和二年点は単独、平安後期点も単独と同一で再読しない。

さて、右の記述の評価を、日本語史の観点から与えようとすると、どのようなことなるうか。

日本語史(国語史)の研究は、第一義的には、特定のある言語事象が、いつ、どういう共時的言語環境下(どういう言語集団、あるいは、個人において)で、どのように変化したのかの記述研究を出発点とする。更に、帰納的方法を用いて行つた記述研究が明らかにした一飽くまで、思索の出発点である一事柄を、法則としての言語変化と捉えて、その法則性の実態を説明するところにある。以上の基礎学としての研究からの進展は、変化の力学への抽象化、即ち、如何なる言語的な力、あるいは、言語外的な力に依つて日本語が変化せざるを得なかつたのかの解明に進むべきであろう。更に、人間学としての日本語史の学問の深化の方向を模索すれば、そこに過去の人間の思考活動の実質を描き出して、「人間存在の本質とは何か」と言う哲学的課題への答えに繋がるべきであらうと愚考する。

日本語史研究の潮流の一つとして、記述的研究に重きを置く、あ

るいは、右に掲げた言語変化の力学への言及以下の事柄は、「帰納的実証性」に希薄な、謂わば、観念論—実証性のない解釈—であつて、これに踏み込む事は、人文学、科学としては、不適当なもの、科学からは逸脱するものだと厳評を下す研究者の流れがある。こうした学問的価値観を否定するつもりは毛頭ない。日本語史研究が、この厳密なる態度による記述研究より発すべき事は、右に説いただけで十分の理解が得られるものと考ええる。

ただ、こうした厳密なる帰納的記述主義の狙うところは、《言語変化》である。即ち、変化したことへのみの関心となりかねない。同じ視点、方法による日本語の歴史の帰納的記述主義において、従来説かれてきた実態的な歴史的イメージを否定し、先行研究を乗り越えた新しい研究の展開を目指そうとすれば、帰納的記述主義の枠内での研究においては、第一には、日本語史料の密度を増す事であろう。ある共時態の日本語史料を博搜して、従来説かれていた変化の時代を引き上げるとかの方向である。こうした研究の方向での新説は、その構築が可能であろうが、—以下は感想に過ぎないが—どれだけの日本語史のパラダイムを書き換えられるかは、心許ないのではなからうか。帰納的記述絶対の硬直した見方が、「日本語史研究は、従来の研究に加えて、今後やるべき事が、果たしてまだ、残っているのか」とした、不当な発言に繋がる。

右の第一点目の批判から、同じ方法に立ち、論説の立脚点の点検無しに、方法論の開拓に心を注がぬままで、ダイナミックな研究を目指そうとすれば、新しい日本語史料群の発掘と云う方向に必然的

に向かう事となる。

右の二つの視角は、帰納的実証法を金科玉条にして、それからの方法的な進展深化を考慮しない、あるいは、「無批判な切り捨て思考」によるものであつて、かかる研究者の思考は、水平的に拡張する方向しか持たない。つまり、資料を悉皆調査すると言う、非現実的な理想を求める教条主義であると断ぜられる。研究の現状を鑑みれば、平安時代の一期、例えば、平安後期、ほぼ十一世紀の百年間でもよいが、現存する日本語資料を—訓点資料と言う資料分野だけでも良い—個人の学問的良心と責任において生存中に調査し尽くす事は、まず、不可能である。

もう少し、研究の本質的な問題として考えてみよう。右の如くの帰納的記述研究のみに、日本語史の学問の眞の存在を認めて、究極の研究目的が言語事象の変化の年代の解明だけを目的とするが如きは、なぜ人文学—即ち、人間学—の枠組みにおいて行わねばならぬのであろうか。稿者の謂わんとするところは、かかる帰納的記述研究は、事象事実の解明として日本語史研究には、出発点として必須の要素ではあるが、これのみに収束するものではなく、人間学としての日本語史学の達成に、研究者は、垂直的深化思考をもつて臨み、更に、人間探究に進むべきであると言うことである。かかる深化の方向性の意識を持たぬ研究は、「謂わば、即物的な研究であるとか、人間学としては不十分なる研究である」との批判に應えることはできないであろう。

次には、日本語史の法則性を求める研究についてである。右の意



識に比べれば、遙かに抽象度の高い研究であろう。右の記述研究を元として、変化のシステムを解明する如きの研究である。ここに説くまでもないが、「唇音退化」の法則は、本質的部分での人間の性向などの理解が描き出されるものと解釈されてきた向きがある。また、例えば、動詞活用の研究は、江戸時代にほぼ完成を見た非常にシステムティックな研究として、学史上評価されるところであるが、近代以降には、この動詞活用の歴史的变化・変遷が問題とされてきた。システムとして如何に変化してきたかの問題は、長じた人間の無意識に存する文法システムの解明であつて、言語活動の前提となる事象の解明である。また、五十音図なども、一般には、日本語の清音音節における一音韻あるいは一文字の体系表で、これもシステムティックに日本語を理解する無意識での抛り所となつていて、こうした研究は、人間の認識の問題を射程としたもので、遙かに人間存在に寄り添つた研究として評価されるところである。

語彙論や意味論研究などは、もつと直接的に、人間認識、例えば、外界の分節に関する解明であるとか、直接、人間存在に関する研究に結びつくものである。

先に批判した帰納的記述研究だけの段階を研究の全てとして、これより出る事を許さない日本語史の旧態然とした学問観において、学問の至上命題である、「複雑なる実態を整理して、より単純なる像(イメージ)で把握しよう」と指向すれば、結局のところ、日本語の変化だけに目が向きがちとなる。つまり、ある事象が、いつ変化したか、いつ生まれたかの、所謂、変化の事実だと解釈し、思い

込んでいる事柄の記述である。資料の博搜に依つて得られた事象の記述研究は、研究者の認知する限りにおいての最古例であつて、即、言語変化の事実とスライドして簡単に認められる事柄ではなく、研究上操作に依つて導き出された実証の限りであるという反省を持たねばならない。が、もつと大きな問題は、今も、また過去も、人間の営為としての言語の変化は、従来の研究の成果即、何年何月の某資料に、新しい変化語形が現れるとかの事象的記述に基づいて、さらに発展したところで、文化史的言語生活史の視点による腑分けが必要であり、そうした方向に踏み出すべきであろう。即ち、日本語の変化は、現在も過去も、新たなインパクトのある表現への移行に働く力と、保守的とも言える言語規範を守ろうとする力との綱引きに抛るものであろうから、人間の営為としての日本語史を描こうとすれば、この両方の力関係を、当時の言語生活に即して、具体的に位置づけ、評価してみる必要があることになろう。

右に記述してきた石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本における二種の訓点の訓読法の比較は、平安後期加点と思しき訓読法において、変化形と認められる事象も、確かに存在して、通時的変化が跡付けられる事象があるのも確かである。副助詞「イ」、「者」字の「ヒト」訓、「従」字の不読、直読の用例量の変化の問題は、正に、変化を如実に示した例である。しかし、「則」字、「當」字、「應」字については、訓読法の変化が確定できない、あるいは、変化していない事象である。即ち、かかる言語事象は、平安初期仁和二年点と、平安後期宝幢院点の訓読法は、変化がないと見るべきである。一般に、所謂再

読字の再読訓、再読表記の事象は、平安中期に変化が起こり、以下、一般的になると認められてきた言語事象である。当該資料は、天台宗関係の平安後期の資料にあつて、そうした集団の中に、平安初期の訓読と変わりない訓読が、行われていたことも事実として存在したことに注目すべきである。即ち、変化した新しい訓読法を用いない密教関係資料群が、平安後期の天台宗内に厳然と存在している事実を目を向けるべきであるし、更には、かかる実態の持つ日本語史的な意義を、言語生活史の中で説かねばならない。

また、抽象化した歴史的記述において斯かる実態を考慮しないとすれば、例えば、当該資料の平安後期点の現象が、例外的なものであるとの解釈がされるかもしれないが、この場合、何故例外として切り捨てるのかと言う事の説明を、実証的方法で行う必要がある。

平安初期の事象を、平安後半期に天台宗で行っているのは事実であつて、この事実は、既に指摘され、問題とされてきた平安初期<sup>(17)</sup>の訓読の移点の問題とも関係しよう。平安後期に理解言語のレベルであつたとしても、実際に、平安初期の言語事象が出現しているのは、紛れも無い事であつて、やはり、共時的に平安後期に並存したとみるべきである。

当該資料の如き場合は、平安後半期の天台宗山門派と言う共時的言語集団において、所謂、古い訓読法が並存した例であつて、天台宗山門派も、更に、小さな共時的言語集団を設定して腑分けするなどの方向で、かかる資料の言語実態を抱え込んでの立体的言語生活を描き直す必要がある。即ち、平安後半期の天台宗山門派には、所

謂、新旧の言語事象が並存しているのであつて、この事実を言語生活史の一部として、文化史、あるいは、宗教史の視点を加味しながら、当時の天台宗山門派における言語意識史の問題として捉え直す必要があると考えるのである。要するに研究者には、これらの視点から、新旧の言語事象の並存―変わろうとする言語の力学と引きとどめようとする規範的意識の相克―を叙述せねばならない義務が生じることとなるう。

その問題は、共時態を細分化して、宗教史学等との融合的発想に依つて説明されるものかも知れないし、更に、究極的には、言語主体としての個体の文体の問題に帰するかも知れない。特に、言語の個体史―一言語主体の個体としての言語の歴史―の観点は、いまままで、希薄であつたと評価せざるを得ない視角であつて、今後の大きな課題であろう。即ち、大局的な言語変化については、日本語史として描かれてきているが、その歴史の中に、言語を實際に担い、運用した個人があつて、その個人にも習得(漢文訓読の教育の場)から運用(言語の表現活動の場)に至る日本語の遍歴があるわけであるから、両視点を取り入れた上での、立体的歴史を描く必要がある訳である。

以上のような理由から、本稿で取り上げた石山寺藏金剛頂瑜伽經仁和二年点本における平安後期宝幢院点の言語事象が、平安初期のものに通ずると言う事実は、蔑ろにされるべき様な小さな問題ではないことが明白であろう。

おわりに

聊か理の勝った論行となった反省はあるものの、現在の史料発掘状況からは非常に稀少である平安初期の密教經典の加点を軸に考えてきた。右に取り上げ記述した事象の重要性は、十二分に理解されたものと判断する。今後の研究の進むべき方向についても取り上げたものであるが、十二分に論じ尽くしているとは到底思えないし、抽象的であるという誹りもあろう。実践を行いつつ、本稿に説いた方向性の修正を目指したく、今後の課題とする。

なお、本稿は試論の域を出たものでは無いとの自覚があるところで、特に、新進の研究者諸兄の批判を切に願うところであつて、多くの反論を、期待を込めて念じている。

## 注

- 1、築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』（平成八年五月、汲古書院）第一部第二章。
- 同『平安時代訓点本論考仮名字体表』（昭和六十一年十月、汲古書院）の五三八・五三九頁に、本稿に取り上げた金剛頂瑜伽經仁和二年点所用の片仮名字体表とヲコト点図が掲載されている。また、築島裕博士は、『石山寺の研究 一切経篇』（昭和五十三年三月、法蔵館）における研究篇「石山寺経蔵の古訓点本について」において当該資料の略説とヲコト点図を掲げていらつしやる。本稿において、稿者が帰納したヲコト点図とは、出入りが存する。
- 2、築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』（平成八年五月、汲古書院）、第三部第五章。
- 3、築島裕『平安時代語新論』（昭和四十四年六月、東京大学出版会）第二編第一章。
- 4、石山寺蔵金剛界儀軌寛平元年点にしても、石山寺蔵金剛界儀軌天永三年点本にしても、平安初期の訓読を伝える加點箇所は、陀羅尼部分に偏っている。金剛界儀軌の漢文部分がどのように扱われたかについては、一考を要する所である。
- 5、中田祝夫「古点本の国語学的研究 総論篇」（昭和二十九年五月、大日本雄弁会講談社）。
- 6、中田祝夫・注5文献。
- 同編『古本点図集二種』（私家版）
- 築島裕編『点図集（稿本）』（昭和四十四年六月、私家版）
- 注2文献。
- 7、注2文献。
- 8、例えば、箕面学園蔵の妙法蓮華經方便品天長五年（八二八）頃点は、築島裕・小林芳規「故山田嘉造氏蔵妙法蓮華經方便品釈文」（『訓点語と訓点資料』第七輯、昭和三十一年八月）
- 大坪併治「稲妙法蓮華經方便品第二試読」（同右）
- 同一輯の學術雜誌掲への載例としてよく知られている。
- 9、訓読文の異同は、訓点の帰納結果の異同のみならず、該当資料の訓点自体の判読、即ち、仮名字号の存在そのものの認知、認識の問題がある。この客観物としての訓点の認知、認識は、現在の学問水準としては、研究者の判断に委ねられているのが実状であるが、その仮名やヲコト点などの符号類の物理的な分析は、今後、理化学的手法に委ねて客観性を増すべき事柄であつて、研究者の解釈を基底とするヲコト点の体系の帰納の問題とは、レベルを異にする即物的な分析研究であると考えている。
- 10、平安初期の密教經典の加點資料は、大毗盧遮那成仏經平安初期点（高野山大学蔵、特殊点甲類）、大毗盧遮那成仏經平安初期点（高野山大学、第二群点）、が知られるが、奥書が無く、稿者未調査である。
- 11、小林芳規「訓点語法史における副助詞『ら』」（『国語と国文学』昭和

三十年十一月号)。

- 12、小林芳規『平安時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(昭和四十二年三月、東京大学出版会)序章第三節には、「則」字の訓読法が取り上げられて記述されているが、「スナハチ則」(不説)、「オヨビト」(及)、「モトト」(不)、「モト者」(何れも古い訓法である。此に対して「スナハチ則」「オヨビ及」「ザル不」「モト者(人物)」は後出の新訓法である。)(二二頁)と記しておられる。「則」字には、本稿に取り上げた金剛頂瑜伽經仁和二年点に直読の確例があるのは本文中に示した。「者」字については、第二節に触れている。「及」字は、訓点の厚い巻第二には存在せず、巻第三には出現するが、仁和二年点の訓読法が確定できない。「不」字は、巻第二に15例出現し、助動詞連体形と思しき例はなく、終止形1例である。巻第三には、「不」字は、11例出現するが、仁和二年薄朱点の語形は確定できない。
- 13、小林芳規「漢文訓読史上の一問題―再読字の成立について―」(『国語学』第十六輯、昭和三十八年十二月)。
- 14、大坪併治「平安初期の仏典における再読字の成立について」(『訓点語と訓点資料』第一二〇輯、平成二十年三月)。
- 15、注13文献。
- 16、注13文献。
- 17、中田祝夫・注5文献。
- 注2文献、第三部第二章。
- 例えば、立本寺本妙法蓮華經における明詮の訓点の識別は、奥書と移点に使用された色彩によつて区別できるものであるが、かかる資料の複数の訓点が更に一筆で移点される如き事態を想定すれば、平安後期において平安初期的言語事象が識別されずに埋没した資料となる。また、平安後期において、平安初期の明詮の訓点が言語行為において生きていたことを重視すべきである。

〔付記〕本稿に取り上げた金剛頂瑜伽經仁和二年点本の調査閲覧については、

石山寺御当局ならびに石山寺文化財総合調査団各位のご高配、ご温情に与つた。記して深謝申し上げる。